
二人の小さな恋物語

ゆっきー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の小さな恋物語

【Nコード】

N1179F

【作者名】

ゆっきー

【あらすじ】

「あなたと私の物語」の江海と健吾の娘・冴子の物語で、片思いからの恋の物語。途中、母親と父親になった江海と健吾が登場してきます。

一週間遅れの転入生

「今日から二学期が始まるね」

九月一日、二学期の始業式。

まだ暑さが残る帰り道で聞いてきたのは、仲良しの磯部沙智。

「そうだね。今日から二学期だなんてダルすぎるよ。まだまだ夏休み気分だよ」

私はダルダルの口調で答える。

「でも、冴子は嬉しいんじゃない？」

「え？」

「だって海野君に会えるしね」

「そ、そんなことないもんっ！」

私つてば思わず大声を出してしまう。

「凶星なんだー」

イタズラっぽく沙智は笑う。

「もー、沙智のイジワルー」

「イジワルじゃないよ」

私の泣き真似に、沙智は笑いながら言う。

私の片想いの相手の海野享平君。学年でとてもモテてるサッカー好きな少年。

今年の四月に高校に入学して、海野君とは同じクラスになった。その時から海野君のことが気になって、気付いたら好きになってた。その理由は多分ないと思う。知らないうちに好きになってたって感じなんだよね。

私、貝本冴子、高校一年。大人しい性格。クラスでもあまり目立たないタイプ。

海野君とは話したことはないんだけど、海野君から何度か挨拶してくれたことがあった。でも、頭を下げることしか出来なかった。沙

智は「好きなら自分から行かなきゃ」って言うんだけど、勇気が出なくて未だに何も行動は出来ずにいるんだ。海野君が好きな女の子達は、自分から話しかけてるのに、その女の子達と同じ片想いなのに、私ってば全然ダメだよ。

始業式からあつという間一週間が過ぎて、私のクラスに転入生がやってきたんだ。

「石水幸奈です。よろしくお願いします」

ペコリと石水さんがお辞儀をした。

黒のロングヘアで背が高く、カッコいい系の女の子。

でも、こんな時に転入生って変だな。一週間も遅れる理由でもあったのかな？ 理由はなんでもいいんだけどね。

「じゃあ、海野の隣な」

海野君の隣の席を指名した先生。

石水さん、海野君の隣の席に座って、笑顔で挨拶してるのがよく見える。

二人の席はちょうど真ん中だから目立つんだから、よくわかる。

二人を見てると、心の中で不安の渦が取り巻く。

もしかして…ううん、違うよね…。

ショートホームルームが終わって、クラスのみんなが石水さんの周りに寄っていく。

「冴子、私達も行ってみようよ」

「あ、うん…」

気のない返事をしてから、沙智と石水さんの席に近付く。

「石水さん、前はどこに住んでたの？」

クラスの一人が石水さんに聞いた。

「神戸に住んでたよ」

「へえ…」

「スポーツは何が得意なの？」

「バスケットだよ。小学生からずっとやってて、中学時代はレギュラーで試合にたくさん出てたんだよ」

「意外だな」

「なんで遅れて転入してきたの？」

「ホントは九月一日に来る予定だったんだけど、八月末におばあちゃんが出なくなって…。それで遅くなったんだ」

ハキハキと答える石水さん。

私なんかと全然違うよね…。

石水幸奈、神戸から転入してきて、バスケットが得意な女の子。カッコいい系だけど、いかにもって感じ。同性に好かれるタイプのイメージ。

そして、石水さんが転入してきて、三日が経った。

彼女は瞬く間に男子からモテだった。海野君とはクラスの男子の中で一番仲良くなって、いつも休み時間は喋ってる。

「冴子も行かなきゃ」

沙智が私の制服の袖を引っ張る。

「ほら、海野君と話さなきゃ。いつまでも見てるだけじゃダメだよ」
「見てるだけでいいよ」

「もー、いつもこうなんだから…」

呆れ顔の冴子。

冴子が言ってることわかる。見てるだけじゃダメで、自分から行動

しなきゃわからないこと。ホントに私の行動力のなさに情けなくなってくるよ。海野君が好きな肝心な私は、海野君を見てることしか出来なくて、とても話す勇気なんて出ないよ。

「あ、今、一人になったよ。行こっ！」

沙智は私の腕を引つ張って、海野君のほうへズンズンと向かっていく。

「沙智~~~~っ」

「いいから。一人でいるうちになんだからね！」

弱気な私を沙智はお構い無しなの。

「海野君っ！」

「おっ、貝本さんと磯部さんじゃん！ どうしたんだよ？」

「用はないんだけど海野君と話したことないなって思っ…ねっ？

冴子」

沙智は私にウインクする。

「う、うん…」

こんなんじゃダメなのに、うつむいてしまう私。

「そういえば、二人と話したことなかったよな。オレは男女問わずクラスのみんなとは話したけどな」

海野君、イスに深くもたれかかりながら話す。

「まだ貝本さんと磯部さんとは話したことなかったな。二人共、仲良いよな」

「そうだよ。いつも私が冴子の面倒みてるの」

沙智つてば冗談まじりで笑いながら話す。

「ひどーい！ 私がみてるんでしょ？」

海野君がいるのを忘れて、いつもの感じで頬をふくらませる。

その姿にいきなり海野君は吹き出してしまった。

「なんか、貝本さんてイメージが全然違うよな」

海野君はお腹を抱えながら笑う。

「え？ そう？」

「大人しいって思ってたから…。オレの勝手なイメージだけだな」

海野君は笑いをこらえたように言った。

そんなふうに思ってたんだ。仕方ないよね。海野君と挨拶くらいで、きちんと話したのは今日が最初だもん。

「享平君、貝本さんと磯部さんと何話してるの？」

教室に戻ってきた石水さんが、当たり前のように海野君の下の名前を呼んで、私達三人の中に入ってくる。

「内緒だよ。内緒の話をしてたんだよ」

海野君が石水さんに笑顔を向けながら答える。

私達に向けてる表情とは違う。

当たり前だよ。この二人、仲良いもん。多分、石水さんは、彼女は海野君のことが好き。あの日、彼女が転入してきた日、不安になったことが的中してしまったみたい。二人の笑顔の裏には、色んな話や笑い声が聞こえてきそうで怖い……。私の知らない海野君を数日のうちに知ってる石水さんが怖い……。気が付いたら、石水さんという、

「存在」が怖くなってるよ――。

石水さんの一言

「沙智、おはよう」

翌日の朝、いつもより遅く学校に着いた。

「おはよう。冴子、今日遅いじゃん」

「うん。昨日、ママとケンカしちゃったんだ。パパが止めに入ってくれたんだけどね」

「へえ…珍しい。冴子でも親子ゲンカするんだ？」

「するよー」

苦笑いしながら答える。

私が答えた後に、ガラツとドアが開く音が教室内に響く。

ドアのほうに目を向けると、海野君と石水さん二人で教室に入ってくる。

そっか…。二人、一緒に来たんだ…。

「冴子？」

「沙智…」

「元気だしなよ！ あんな光景見ただけで落ち込んだじゃダメだよ」

「そっだよな」

とりあえず、返事はしてみたけど、ため息まじりになってしまふ。

ショートホームルームが終わって、いつもの見慣れた光景が私の目に入る。

海野君の周りには、相変わらず石水さんがいて、海野君の一番の友達の有森君もいる。そして、二、三人の男子も集まって仲良く話してる。

「石水さんて、ライバルとする女子っているの？」

何気なくそばにいた男子が、大声で石水さんに聞いた。

石水さんは少し考えて、いつもの笑顔でこう答えたんだ。

「私がライバルとするのは、貝本さんだよ」

「マジで?!」

「貝本、石水さんがライバルだってよー。どうする?」

「いいなー。オレも貝本になりてー」

男子が私を羨まそうに叫ぶ。

「冴子…」

私、自分の顔がひきつってるのかよくわかる。

私に対して、石水さんは余裕の笑顔でいる。

「なんでライバルが貝本さんなんだよ?」

有森君が聞く。

クラスがしんと静かになる。

「それは、恋のライバルだからよ」

石水さんがそう答えると、突然クラスが爆発したようにうるさくなつた。

「石水さんて好きな人いるの?」

「いるよ」

「誰なの?!」

「秘密よ。多分、貝本さんも私と好きな人一緒のはずよ」

余裕綽々て話す石水さんは、まるで自分が好きな人と付き合う寸前までいつてるのよという口調だ。

これってかなりマズイ状況だね。きつと海野君と話したり見つめたりしてるから、石水さんにはバレてたんだ。ど、どうしよう…。

石水さんには勝てっこないよ…。

「冴子、バレてるよ」

沙智がそつと耳打ちする。

「うん…きつと私には石水さんは海野君が好きだってことわかってるよ」

私の声、かなり動揺してる声だ。

「こればかりは仕方ないけど、クラスのみんなにバレないように」

しなくちゃ、だよ」

「そうだよね…」

石水さんにバレてるなら、海野君にもバレてるのかな？ 最悪だ。誰か、私と変わって欲しいよ。ホントに…ホントに…どうしよう…。

あつという間に放課後になった。

私は一日憂鬱な気分で授業を受けていて、今日は早く帰ろうと何度も思っていた。

「冴子、大丈夫？」

「うん、大丈夫。今日は早く帰るよ…」

ため息をついた後に、沙智の質問に答える。

「そうしたほうがいいかも。あまり無理しないでね。私、これから部活だからいくね」

「ありがとう。また明日ね」

教室の前で沙智と別れると、下駄箱に向かった。

沙智は料理部にいるんだ。週に一日だけの部活で、今日がその日なんだ。

あーあ、これから石水さんに目つけられるのかな。嫌だな…。別に好きな人がいたっていいじゃない。おかしいことじゃないもん。

そんなことを思いながら、正門へと向かう。

「貝本さん」

誰かが声をかけてきた。

振り向くと、ロングヘアがとても似合っている石水さんが立っていた。

私は声が出ないまま、石水さんを見てるだけ。

「話があるんだけどいい？」

石水さんの問いかけに頷くだけしか出来なかった。

私達は駅前にあるファーストフード店に入り、ジュースを頼み席に

着くと向かい同士に座った。

「ねえ、享平君のこと、好きなんでしょ？」

「……」

「この前、磯部さんと話してたから貝本さんは海野君が好きなのかなって思ったのよ」

「……なんで……わかったの……？ あの時、沙智もいたのに……」
「やっとの思いで声が出て聞いてみた。」

「恋してる人のことがなんとなくわかるのよ」

ふーん……そうなんだ……。恋する女の勘ってヤツか……。

「私も好きだから、貝本さんの気持ちがわかるよ」

「え……？」

「好きな人に自分の気持ち、バレたくないって誰でも思うもん。享平君は貝本さんの気持ち、知らないみたいよ」

「そう……」

「私と貝本さんが告ったら、享平君は私を選ぶと思うよ」

「……どういうこと……？」

「私と享平君は仲良いもん。貝本さんは言うほど仲良くないじゃない」
「い」

「そ、そんなことない！ まだわからないじゃない！」

自分でも気付かないうちに大きな声を出しちゃってる。

「そう？ 享平君は私のこと好きだと思うけど？」

「そんなことないもん！」

「そんなにムキになることないんじゃない？ 高校生なんだから、落ち着いたら？」

石水さんはイジワルなことを言って、いつもの笑顔をする。

私は何かを言いたいことをぐっところえた。

も——つつつつ！！ サイテ——！！ 石水さんは性格悪すぎだよおお！！ 石水さんと付き合うくらいなら、私と両想いになつて付き合いたいよ。明るくて活発的なのはいいけど、性格悪いのは困るよ。ひっぱたいてやりたいのを堪えて言い返すだけにしたけ

ど、やっぱりひつぱたいてやれば良かったよ…。
でも、石水さんと喋ってる海野君は嬉しそうで楽しそうにしているのは確か。やっぱり、石水さんのこと好きなのかなあ？ 海野君は石水さんみたいに活発的な女の子がいいのかなあ？ それにしても、海野君も鈍感かも？ 石水さんと喋ってて性格悪いの気付かないのかなあ？ 性格悪くないようにしてるんだと思うけど、なんだか納得いかないなあ…。早く気付かせなくちゃ。私が気付かせなくちゃいけないんだ。明日からでもいいから、自分の殻を破って少しずつ変わっていきなさいけないよね。

「えっ？ 呼び出された？」

沙智が驚いた表情をした。

翌日の朝、駅前で沙智と待ち合わせして昨日の出来事を話したの。

「うん。昨日の石水さんのイジワルな言い方を聞いてたら、性格悪いって思っちゃったよ」

昨日の出来事を思い出しながら話す私は、ドンヨリした表情で答える。

「冴子、絶対に負けちゃダメだよ。私、冴子のこと応援してるからね」

「ありがとう、沙智。私、頑張るよ」

ガッツポーズをして気合いを入れる。

海野君と石水さん。モテる男子と美人の女子の組み合わせ。端から見れば、最高のカップルだよな。でも、この組み合わせじゃ上手くいかないような気もするよ。

海野君、石水さんのことが好きなの？ 好きなら、私の想いはどうすればいいの…？

「貝本さん！」

休み時間、私はトイレから出てきたところを誰かに呼ばれて、声のするほうへ振り向いた。

「あ、海野君……」

なんだか、気まずいな……。

海野君の顔を見て、思わず下を向いてしまう。

「昨日のあのこと、気にしてんのか？」

私が下を向いてしまったのを見た海野君は、気にかけてくれる。

「え、あ……」

気にしてないって海野君に伝えようとしても上手く言葉に出来ない。

「昨日一日、貝本さんが元気なかったから気にはしてたんだ」

「私は大丈夫よ」

そう一言、精一杯の強がりを見野君に言う。

「……ならいいんだ。あまり石水の言ったこと深く気にすんなよ。気にしすぎると辛いだけだしな」

「ありがとう」

軽く頷いた後に、礼を言った。

海野君は優しいんだね。見るだけじゃわからないこと。今、わかったよ。行動してわかったこと。たくさんあった。

「でも、石水はイジワルなところもあるけどいいところもたくさんあるんだぜ」

「……え……？」

私の胸の中で何かがざわついた。

「海野君……？」

「気は強いけど友達思いなところやスポーツ得意なところは尊敬するよ。結構見てるんだ」

「……」

何も言えなくて、再び下を向いてしまう。

海野君がそんなこと言うと、昨日のファーストフード店で石水さんが言ったこと。私より石水さんを選ぶ。あのセリフを裏付けているようで怖いよ。こんなこと、私信じたくない。信じたくないよ。そう思うけど、心の中で違う何かが叫ぶ。

海野君と同じクラスで良かった。海野君と話せて嬉しかった。昨日のこと心配してくれて嬉しかった。海野君の特別な存在になれたみたいなのがしたの。確証はないけど、やっぱり海野君は石水さんが好きなんだ。

もし、タイムマシンがあるのなら、海野君と会おう前に、高校を入学する前に戻りたい。私の「好き」を消し去って欲しい。海野君を想う気持ちも何もかも消し去りたい。この気持ちにサヨナラして、もう一度やり直せたらいいのに…。もう一度出会った頃にやり直せたらいいのに…。海野君を好きにならなければ良かった。ホントに後悔だよ…。

つぶれた恋

石水さんが転入してきて一ヶ月が経ち、十月になり外はもう秋になった。

海野君と石水さんは相変わらず仲が良くて、石水さんは男子にモテている。

私はというと、なるべく二人には近付かないようにしてる。海野君は私に今まで通りに接してくれてるのに、私はぎこちない笑顔で接してしまっている。石水さんにファーストフード店であんなこと言われても、海野君が好き。好きにならなければ良かったって後悔もしたけど、やっぱり海野君が好き。自分の気持ちに嘘はつけないよね。

「そんなんじゃないダメでしょ？」

昼休み、沙智がいつもどおり相談にのってくれる。

「もう一度、頑張ってみる。諦めたくないの」

「いいんじゃない？ 諦めたら辛いだけだもん」

「そうだよね」

「さっ、行こう」

沙智は何かを決意したようにイスから立ち上がる。

「行こうって…どこに…？」

「海野君のそこよ。昼休みだと中庭で有森君と話してるみたいだしね」

「海野君と有森君！」

中庭で二人仲良く話してるのを見つけた沙智は、二人を呼ぶ。

「おっ、磯部さんと貝本さん」

「何話してたの？」

「まあ、色々とな」

有森君は遠回しに答える。

「そっか。ホント、二人は仲良いよね」

「ハハハ…そうだな。よく言われるよ。そういう、磯部さんと貝本さんも仲良いじゃん」

「まあね。私達は凄いい仲良いよ。ねっ？ 冴子」

「そうだよ」

笑顔の私と沙智と有森君。

だけど、真剣な表情の海野君。

一応、海野君の表情には気をとめていたけど…。

「海野君、どうしたの？ 元氣ないよ？」

沙智が海野君の顔をのぞきこんで聞く。

多分、私の思っていたことに気づいたのか、沙智も私と同じことを思ったのかわからないけど、沙智が口を開いたんだ。

「実は、オレ、好きな人いるんだ」

海野君の衝撃的なセリフに、私は頭の中がわけがわからなくなった。

「享平って好きな人いたんだ？」

「うん。そりゃあ、オレだって好きな人ぐらいは…」

「誰だよ？」

「さあな」

海野君は答えをはぐらかすと、立ち上がった。

「海野君、どこ行くの？」

「教室だよ。もうすぐで昼休みが終わるチャイムが鳴るだろ？」

「ああ…そっか」

私達四人は教室に戻った。

私は不安な気持ちを抱えながら…。

海野君の好きな人。有森君にも言っていなかった好きな人。それは一体誰なの？ 石水さんのなの？ 私なの？ それとも違う人なの？ 「さあな」って答えてたけどはぐらかさないでよ。そんな答えだと

不安になつて、胸が潰されてそうなんだよ。ちゃんとホントのこと
言つて欲しいよ。海野君…。

もし…もしもだよ。海野君の好きな人が石水さんだとしたら、私は
どうしたらいいの？ 私の気持ちはどうしたらいいの？ もう忘れ
なきゃいけないの？ 諦めなくちゃいけないの？ ねえ、教えてよ。
そうじゃないと私何もわからない。海野君の気持ちも、海野君が想
つてる人も…。

そして、海野君の好きな人が私だとしたら、石水さんはどうなるの
？ 私みたいに忘れなきゃいけないの？ 海野君が選ぶことで、ど
ちらかが不幸になる。それだけは嫌だよ。いつそのこと、海野君が
二人いたら良かったのに…。そうすれば、どちらかが不幸にならず
に済んだのに…。

あれから、五日が経った。

なんか、海野君と石水さんの仲がギクシャクしてる。いつもなら朝
も「おはよう」って元気よく挨拶してるのに、頭を下げあつてるだ
け。休み時間も二人仲良く喋ってるのに、石水さんは違うクラスに
行つてしまつてる。なんだか、しっくりこない。それが始まったの
は三日前。初めはこういうこともあるかつて思つてたけど、三日も
そんな調子じゃ何かあつたのかなつて考えちゃうよ。もしかして…
とは思うけど違うよね…。

「海野君と石水さんてなんかおかしくない？」

昼休み、学食で二人で食ふことになつただけで、沙智は海野君
のことを話題に出した。

「確かに。他人行儀つていうか、そんな感じだよな」

「うんうん、言えてる」

「何かあつたんだろ？ 気になるよね」

「どちらかがフラれたんじゃない？」

「どういうこと？」

「例えば、石水さんが海野君に告ってフラれたとか。それなら筋が通るじゃない？」

「そっか。考えたくないけどその逆もあるかもしれないもんね」

「海野君、好きな人いるって言ってたし…。でも、それなら二人は付き合ってるよ」

「それもそうだよね…」

私は考え深くなりながら頷く。

そう、私と沙智みたいに二人のことを噂してる子達がたくさんいるんだよね。同じクラスの子は勿論、他のクラスの子が噂してるんだよね。でも、二人は気にも止めていないみたいで何事もないように過ごしてる。

「海野君っ！」

沙智は部活のミーティングだから別れて、私は学食から教室に戻る時に、中庭で一人で座っている海野君を見つけた。

「あ、貝本さん…」

「最近、元気ないみたいだけど何かあった？」

「うん、ちよつとな…」

どこことなく元気ない返事をする海野君。

「どうしたの？」

もう一度、聞いてみる。

でも、海野君は何も話してくれない。

「海野君…」

私は海野君の名前を呟いたまま黙ってしまふ。

そして、海野君はゆっくり口を開いた。

「オレ、好きな人にフラれちゃって…」

「えっ?!」

ビックリしてしまう私。

「オレらのクラスに岡田さんっているだろ？」

「うん」

「フラれたんだ。それを石水が気付いたんだ」

「ケンカしたの？」

「まあな。石水って性格悪いよな。今になって気付いたよ」

悲しい表情で話してくれる海野君。

ギクシャクしていた二人の仲。気になっていた理由がやっとわかった。そして、海野君の好きな人も――。

海野君が岡田さんに告白した。

私でも石水でもなかった、海野君の好きな人。海野君のこと好きなのにどうすることも出来ない。海野君が石水さんが性格悪いって気付いてくれたのは嬉しいけど、海野君は岡田さんのことでいっぱいなんだよね。失恋のことはわからないけど、わかる部分もある。好きな人に振り向いてもらえない辛い思いをすること。

「フラれても頑張るよ!」

空元氣の海野君。

それがなんだか辛い。

「岡田さんのこと忘れて次の恋でもしようかななんて…」

「大丈夫だよ。海野君モテるから…。何も出来ないかもしれないけどなんでも話してよ。話すだけでも気が楽になるしね」

私は言葉を選びながら海野君に伝える。

「ありがとう、貝本さん。次は貝本さんに恋しようかな?」

海野君は何気なく言う。

「う、海野君?! 何言ってるの?!」

「ハハハ…。ま、貝本さんは性格悪くないから彼女にするならいいかもな」

海野君の精一杯の笑顔で言ってくれる。

とても嬉しい。こんなこと言われるは嬉しいよ。

海野君がフラれたのと同時に、石水さんは海野君にフラれたことになるんだよね。私だってフラれたことになる。ううん、私も石水さんもフラれてない。海野君が岡田さんにフラれただけ。そうだよ。海野君がフラれただけ。自分に言い聞かせて、心の中を海野君いっぱいにする。

…次は貝本さんに恋しようかな？…

岡田さんのこと以外に考える余裕なんてないのに、私と付き合おうかななんて言ってくれた。海野君だって岡田さんのこと好きだった時も、岡田さんのこと考えてたんだよね。私も海野君のことしか考えられない。海野君と同じことなんだよね。海野君はフラれたばかりだもん。すぐには人を好きにはなれない。

もうすぐで秋から本格的に冬になる。冬は人と人を近付ける季節。その通りだと思う。私も海野君に近付いてる。海野君のこと好きだから、頑張ればなんとかなる。

私、海野君の側にいたい——。

元に戻らない二人

年が明けて、一月ももう真ん中。女子みんな、バレンタインのことでいっぱい。手作りにするだとか高級チョコを買うだとか、色々話してる。雑誌やお菓子の本を持ってきて、明けては悩むって感じなの。

「本命のチョコの色はホワイトなんだって」

「マジで？ 私、彼に手作りのホワイトチョコをあげよっかな？」

「それいいかも。でも、私は今年は買うことにしたんだ」

「手作りのほうが思いこもっててよくない？」

「そうだけど私は買うんだ」

街中、学校中、学年中、クラス中がバレンタインの話でいっぱい。

「冴子、どうすんの？ 海野君にあげるんでしょ？」

学食で二人で昼食中に沙智が聞いてくれる。

「うん…」

気のない返事の私。

「どうしたの？」

「うん…」

「何よ？ 言ってごらん」

「なんか、海野君と石水さんが仲良くないなって…」

「そんなことか。冴子が気にすることないんだって。今はバレンタイン、チョコのことだけ考えなって」

「そうだよね」

「でも、冴子の言うとおり二人仲良くないよね」

「でしょ？ 海野君が岡田さんに告白した時からね」

「いいんじゃない？ 冴子のライバル減ったんだし…」

「まあね」

そう、去年のあの日から海野君と石水さんは仲良くなって、一言も

喋ってない。

「海野君は好きじゃない」って、石水さんは言ってた。もう元に戻らない。二人はどこかで歯車がずれたんだ。そう思ってもいいよね。」

「沙智、チョコ買いに行くの、ついてきてよ」

「オッケー！」

駅前にチョコ屋さんあるから行ってみようよ」

笑顔で答える私。

チョコをあげる決心をしたものの、ちゃんと渡せるかな。あの日から海野君と向かい合って話せてない。挨拶しかしてない。だから、少し不安が残る。大丈夫。海野君ならわかってくれる。私の気持ちわかってくれる。

今までは海野君が好きな人と一緒になるならそれでいい。そう思ってた。でも、今は違う。私の気持ちを伝えたい。出来ればハッピーエンドになりたい。現実はそのなりに簡単じゃないけど、甘くないけど海野君に気持ちを伝えるだけでも違うよね。立派な恋だもんね。失恋はしたくないけど、出来ることはするから、私頑張るから、神様、ちゃんと見守っていてください——。

「うわー、人たくさんだね——」

放課後、駅前のチョコ屋さん沙智と来たんだけど、予想以上に人が多くてビックリしてしまう。

「バレンタイン前だね。冴子、あまり甘くないほうがいいんじゃない？」

「程々に甘いほうがいいってこと？」

「そう。試食用のチョコ食べてみたらいいと思うよ」

沙智の意見を取り入れつつ、ちょっと自分の好きなチョコも取り入

れていく。

「冴子、これいいんじゃない？」

四個目のチョコを食べた沙智が指差して言う。

「餅チョコかぁ…」

「人とは違うと思うよ」

「そうだよ。私が気になってるのは、マシヨマロのチョコなんだよね。うーん…どっちにしようかな？」

二つのチョコを前にして真剣に悩む私。

そんな私に沙智はクスクス笑いだす。

「沙智？」

私はチョコから目を話して沙智を見る。

「うーん。冴子が真剣だなんて…」

「そうかな？」

「うん。前よりか行動的になってる」

「行動的になった、か…」

行動的になった。確かにそうなのかもしれない。去年、沙智と一緒に海野君と話しに行つてなければ、今の私はなかった。

二月十四日、バレンタインデー。今まで辛いことや大変だったけど、私頑張る。今、頑張っておかないと後で後悔する。それだけは嫌だから、一生懸命頑張る。

それにしても、石水さんは海野君にチョコあげないのかな。「好きじゃない」って言ってたけど、まだ好きなんじゃない？ 石水さん、海野君のこと好きなんじゃない？ もし、まだ好きなら私…。不安なハートが呟く。

翌日の朝、私より早く来ていた石水さんを正門近くに呼び出した。

「貝本さん、話って何よ？」

少しイラつかせた口調の石水さん。

「海野君にこと好きじゃないって前に話してたから、ホントのところどうなのかなって…」

自分が呼び出したくせに弱々しく言ってしまう。

「もう好きじゃないわよ。私、転入した時から好きだって言ってる、海野君も好きだって言ってくれたのに、それが岡田さんのこと好きだったなんて…。そんなのひどいし、優柔不断過ぎるわよ」

そう言った石水さんの表情、悲しかった。

「もうすぐでバレンタインだけど、貝本さんフラれるんじゃない？」

「なんで、そんなことわかるの？」

「海野君、まだ岡田さんのこと好きみたいだし…。バレンタインまで片想いを楽しんだほうがいいわよ」「そ、そんな…」

言葉につまってしまう。

「フラれるんなら、チョコあげないほうがいいんじゃない？」

「そんなことわかんないよ!!」

私はカチンときて大声で叫んでしまう。

大声で叫んだ私にビックリしている石水さん。

そんな私達を登校するみんながチラチラ見てる。

その時だった。

「石水と貝本さん…」

海野君が近付いてくる。

「海野君…」

石水さんが海野君に気付くと、バツが悪そうな表情になる。

この二人を見てると、胸がつまってきて、私走って逃げた。気が付いたら、自分の教室まで逃げた。

「貝本さん、急にどうしたんだよ？」

私を追いかけてきた海野君が私をのぞきこむ。

「石水と何かあったのか？」

「う、ううん…なんでもない」

「顔悪いぜ？」

「大丈夫だから。海野君は心配しないで」

そう言つと、私は自分の席に座つた。

フラれるんなら、海野君にチョコをあげないほうがいいの？ 海野君は岡田さんのことがまだ好きなの？ 私、どうしたらいいのかわからないよ。こんなに好きなのに、こんなに想つてるのに…。

さつき二人から逃げたのは、石水さんのこと色々言う資格がないっ気付いたから。石水さんが海野君のこと好きでも嫌いでも、石水さんの勝手だつて気付いたから。海野君が岡田さんのこと好きでもいいじゃないって思つたから。矛盾してるけど、そう気付いたから逃げたの…。

そして、今さつき気付いたの。もう二人は戻れないって…。海野君が好きだつた石水さんには戻れない。石水さんと仲がいい海野君には戻れない。誰が悪いんでもない。とにかく、私がとやかく二人のことを言う資格なんてない。

今はバレンタインのことだけ、海野君のことだけ考える。沙智にも応援してもらつて頑張らなきゃ。一人ではどうすること出来ないけどあるかもしれないけど、沙智となら出来るかもしれない。やつてみなきゃわからないこと、たくさんある。私に必要なものは、たった一つ。「勇気」——。ただ、それだけ。

十六歳のバレンタイン。勇気をもらつて、海野君にチョコを渡す。臆病な殻を破りすてなきゃ。失くすことがあるかもしれないけど、出来るだけやつてみなきゃ。

私勇気出せたよ！

あつという間にバレンタイン・イブ。少し曇り空。明日、晴れるって言ってたけど大丈夫かな？

学校から帰って、前に沙智についてきてもらって買ったチョコを見つめる。透明のプラスチックケースに入った、一個ずつ包んだマシヨマロのチョコを買った。水玉模様のメッセージカードと封筒をつけてくれて、カードの真ん中に「好きです」そう一言と自分の名前を書いて、封筒の中に入れた。そして、無地の袋にチョコのケースと封筒を入れた。

——「チョコ、受け取って下さい」——

心の中で呟く。明日は絶対に逃げない。逃げたくない！！今まではグチグチ悩んだ。やっと決心がついた。チョコを渡す決心がついた。

海野君、明日、私のチョコを受け取ってくれますか？ 私のこと好きですか？ それとも…。海野君に聞きたいことがあって胸がザワついてる。ずっと海野君が好きだった。出逢った時からずっとずっと…。でも、もうこの想いは隠したくないの。早く海野君に伝えたい。伝えなきゃいけないんだ。

二月十四日、聖バレンタインデー。ついにこの日がやってきた。学校はいつもよりにぎやわ。チョコを渡す女子がチラホラいる。

「冴子、早く行きなよ」

沙智が私の耳元で言う。

「う、うん…」

返事はしたんだけど、すごく緊張。

決心はちゃんとしたのに、なかなか行動になれない私。

「ま、渡すのは冴子次第だしいつでも渡すチャンスはあるわよ」

沙智は気楽に言う。

「そうだよ。チャンスはあるよね」

「あるけど、渡さないなんてのはなしよ。せつかく渡すって決心して、チヨコ持ってきたんだから…」

さりげなく忠告してくれる。

「渡さないなんてことはしないよう」

頬をふくらませて言う私に、沙智はクスツと笑った。

チヨコを渡せずに放課後まできちゃった。

掃除当番の海野君を、サッカー部の部室近くで待つことにしたんだ。掃除が終わった海野君が部室にやって来る。

「あれ？ 貝本さん？ 何してるんだよ？」

ビックリ顔の海野君。

「あ、あのっ…」

「ん？」

「あの…これ…チヨコ…受け取って下さい…」

やっとの思いで出した声、すごく震えてる。

海野君、さっきよりビックリ顔になってる。

そのビックリ顔が私にも伝わってくる。

私、緊張と返事が聞くのが怖いのもあって、海野君の顔をまともに見れない。

「ありがとう。オレも貝本さんのこと好きだよ」

照れながらチヨコを受け取ってくれる海野君。

「今年に入ってからなんか気になって…」

顔を赤くしながらそう言ってくれる。

私…海野君の彼女なんだよね？　なんか…すごい…嬉しい…。切ない思い、辛い思いもしたけど、私の気持ちが海野君に伝わったんだ。
「貝本さんの下の名前ってなんだっけ？」

「冴子だけ…？」

「わかった。下の名前で呼びたいなって思っただけどダメ？」

恐る恐る聞く海野君に私は首を横に振る。

「ありがとう。じゃあ、今日からよろしくな」

海野君はそう言った後、笑顔になった。

「二人、くつついたんだ？」

翌日の昼休み、私と沙智と海野君と有森君の四人で食べることに
なったんだけど、有森君は意外そうな口調で言った。

「そうだよ」

「前は岡田さんが好きだなんて言ってたのにな」

「前は前。今は今だよ」

「人の気持ちって変わりやすいな」

「だよー」

「磯部もそう思うか？」

「うん。気持ちは自分だけしかわからないもんね」

沙智はしんみりと言う。

なんか、沙智と有森君で仲良いよね。似合ってるよ。二人付き合っ
たらいいのに…。

そう思いながら、私は二人を見ていた。

「冴子、何二人をジロジロ見てんだよ？」

「あ、うつん、なんでもない」

慌ててご飯に手をつける。

「羨ましいな。あー、私も彼氏が欲しいなー」

沙智がわめきながらお茶を飲む。

「大丈夫よ。沙智に好きな人出来たら、私、手伝ってあげるね」

「何よ？ その笑顔は？」

「なんでもないよー」

私は笑顔のままご飯を食べる。

もし、チヨコを渡してなかったらどうしてただろう？ 後悔してたと思う。もしかしたら、海野君は他の女の子と付き合ってたかもしれない。それにタイミングが違えば、岡田さんと付き合ってたかもしれない。他の女の子と付き合ってたから、勇気を出してチヨコ渡したんだ。

バレンタイン、自分でもダメだと思ってた恋が実りました。楽しい事もあった。嫌な事もあった。辛い事もあった。色んな気持ち乗り越えてきたんだ。でも、私勇気を出せたよ。

恋のキューピット引き受けます!!

バレンタインから一週間、私は海野君と仲良くしてる。沙智は「彼氏欲しい」ってずつと言ってる。だけど、有森君はなんか元気ない。海野君と付き合い始めて、海野君の友達の様子まで見るようになってる。有森君は授業にも身に入っていない感じなんだよね。

「有森君で恋してるんじゃないかな？」

休み時間、私は沙智に言っただけど、

「誰に？」

沙智はぶっきらぼうに逆に聞いてくる。

「そんなのわからないけど、そうじゃないかなって…。バレンタインもらえなくて、それで…」

「それはあるかも。ちょっと元気ないもんね」

「でしょ？」

「もし、そうだとしたら、その好きな人って冴子だったりしてー？」

冗談まじりの口調の沙智。

「まさかあ…。そんなの絶対ないってばあ」

「そのまさかだったりして。冴子が海野君とくっついたからショック受けてるかもよ」

「そんなのではない。なんで有森君が私のこと好きなのよ？ 普通、

海野君に言うでしょ？ 海野君に言わないなんて変だよ」

「海野君だって岡田さんが好きだってこと言っただけじゃない」

「そりゃあ、そうだけど…」

弱気になる私。

海野君が言わなかったからって、有森君は同じことしないと思うけど…。

「噂をすれば二人が教室に入ってきたよ。ホント、二人共仲良いよね」

「そだね」

私は教室に入ってくる二人を見つめながら返事する。

有森君が私のこと好きなら、私は有森君をふったことなの？ それに、有森君も海野君と同じことをしてたのなら、なんで私に一言言ってくれなかったんだろう？ 「好き」って言うてくれたら有森君は傷つかずにすんだのに…。

まだ私のこと好きだって決まったわけじゃない。他の女の子が好きで、それで辛い想いをしてるのかもしれない。好きな人の事で悩んでるわけじゃないかもしれない。他の悩みかもしれない。私ってば勝手に有森君が好きな人がいるって決めつけてるよ。

放課後、私は海野君と有森君とカフェにやってきた。

海野君に「話があるから」って引つ張られてきたんだけど、休み時間に沙智と有森君の話をしたから余計に気になってしまう。

「冴子、有森の悩み聞いてやってよ。これは冴子にしか言えねーらしくてさ」

海野君はオレンジジュースを飲んだ後に言った。

その言葉に私の肩が少し動いたのがわかった。

もしかして、有森君、「オレと付き合ってくれ」なんて言い出すんじゃない…。まさか…とは思うけど…。

「有森、早く言えよ」

「うん…」

返事だけすると有森君は顔を赤くする。

「実は、磯部さんの事が好きなんだ」

突然の有森君の告白によくわからない。

「さ、沙智の事…？」

「ずっと磯部さんが好きなんだ」

「悩んでたんだ？」

「うん。バレンタイン、もらえるかなって思ってたけどもらえなくて…。貝本さんに相談してみようって思ってたんだ」

「恥ずかしそうにしながら頭をかく有森君。」

「沙智、好きな人いないみたいだよ。それに、沙智は優しいし大人っぽくて、有森君とは似合うって思ってたんだよね」

「貝本さん…」

「わかった。私がなんとかしてみるよ」

「冴子、バレねーようにさりげなくな」

「大丈夫よ」

ガッツポーズをする私。

「有森、良かったな」

「ああ…」

有森君はホッとしたような表情をする。

私でもいいのなら有森君の相談にのれるのは嬉しいんだけど、どうやって沙智に有森君の気持ちを気付かせよう？ 悩むなあ…。

次は私の番だね。でも、逆のような気がするな。普通は海野君に相談するのにな。私は海野君と付き合ってて、沙智と友達だからだよ。沙智と有森君、付き合ってたってほしい。こうなったら、張り切っちゃう。一緒にWデートしたいもん。

有森君、私、頑張るよ！！

翌日、さりげなく沙智に昨日の話をしたの。

「有森君てやっぱり好きな人いるんだって。昨日、聞いたんだ」

「そうなんだ。で、誰なの？」

「そ、それは…」

そんなこと本人の目の前で言えない。

「名前聞いたんでしょ？」

「う、うん、一応はね」

しどろもどろで答える私。

「じゃあ、教えてよ」

沙智の顔が教えてっていう表情になってる。

「内緒！」

「いいじゃない。ここまで言わないなんて…気になるわよ」

「内緒よ。沙智は有森君の事どう思ってるの？」

「どうって…」

沙智の顔がみるみる赤くなる。

「沙智…？」

「私、有森君の事好きだよ」

「なんだ。そういうことか」

「何、一人で納得してんのよー？」

「なんでもないよ」

私は嬉しくなっって首を横に振る。

沙智も有森君が好き。両想いだね。沙智の場合、私みたいに恋のライバルはいないみたい。すぐに有森君の彼女になれる。沙智まで私と同じ想いをさせたくない。辛い想いなんてさせたくない。恋で悩むのは私だけでいい。

でも、心のどこかで羨ましいって思ってるのかもしれない。だって私みたいに悩まずに好きな人と両想いだもん。有森君は沙智の事を想ってて、沙智も有森君の事を想ってる。私の片思いは、海野君に好きになっってもらう前に岡田さんが好きだった。そして、石水さんと色々あっって私を好きになった。すごく遠回りしたけど好きになってもらっただけでも良かったと思わなきゃダメだよな。

「今日、有森君とデートしたら？」

私は思い切っって言ってみる。

沙智はわけがわからずポカンとしてる。

「いいよお」

沙智は私の言った言葉を理解して照れて言う。

「私の時は“行け、行け”って言ってたのに…」

「だって…」

「いいから…。有森君に伝えておくね」

「うん…」

「じゃっ、決まり——!!」

「冴子…」

不安そうな沙智。

「何よ？」

「やっぱりいいよ」

「ダメよ」

「わかった。わかったよ」

沙智は首を縦に振る。

「沙智が羨ましいな」

私はポツリ言ってみる。

「なんで？」

「実はね、有森君の好きな人は沙智なんだよ」

私は隠しきれなくて伝えてしまう。

「ホントに…？」

「うん。ホントは本人から伝えたほうがいいんだけど言っておくね。聞かなかったことにしててね。有森君から気持ちを伝えると思うから…」

私はお節介だと思いつながら、言葉を選びながら沙智に伝える。

「だから、私は沙智が羨ましいなって思ったんだ」

私は沙智の顔をまっすぐ見て言った。

「私達、両思いなんだね。私も冴子みたいに色々悩んでみたいな」
空を見つめながら言う沙智。

「すぐに両思いなんて味気ないもん。冴子のほうが羨ましい。色んな想いをして好きな人と付き合う。そのほうが好きな人と付き合え

た喜びが大きいしね。私もそんな恋を試してみたいもん」

「そうかもね。私つてば遠回りの恋で嫌だったけどね」

「両想いになれたんだしいいんじゃない？」

「そうだよ」

私が答えると、沙智と笑いあった。

…すぐに両想いなんて味気ないもん…

沙智の言葉が頭で回る。

私が沙智だったら同じこと思ってた。私と沙智、逆の恋が良かった。そう思ってたけどそんなことはないんだね。人から見れば私みたいな恋がいいっていう人もいるんだね。人には色んな恋物語があるんだ。今まではこんな恋は嫌だと逃げそうになってた。でも、逃げなくて良かった。

放課後、私達四人は正門の前にいる。

有森君と沙智、二人はデートすることになった。なんか、二人は沙智の様子が変なんだ。昼休みまでは喜んでたんだけど、なんかあったのかな？ 沙智とは正反対の有森君は海野君に冷やかされて恥ずかしそうにしている。「冷やかすなよー」なんて言ったりしてる。

「色んなところ行けよ」

「わかってるよ」

「有森君、部活いいの？」

沙智は緊張しながらも有森君に聞いている。

「今日は休みだ。まあ、昨日はサボったんだけど。明日、部長に怒られるだろうなあ…」

有森君、バツが悪そうに頭をかきながら答える。

「磯部さん、行こうか？」

「うん」

沙智はうなずくと私達のほうを見る。

「じゃーな！ 享平！」

「オウ！！」

二人に手を振る海野君。

「あの二人上手くいくといいな」

二人の後ろ姿を見ながら海野君が呟く。

「上手くいくよ」

二人の気持ちを知ってる私はうなずきながら言う。

「そうだな。じゃあ、オレ部活行くな。冴子、今日はありがとう」

「ううん。大したこと出来なかったけど…」

「また明日な！」

海野君は手を振って部活へと向かった。

多分、沙智は不安になってるんだと思う。好きな人を想って切ない気持ちになること。誰かに取られてしまうんじゃないかと思う気持ち。わかる気がする。私も同じこと思った。一人じゃどうすることも出来ないこと。誰かとやらなきゃ出来ないことあるんだよね。

冷たい風が私の頬に流れてくる。この風バレンティンデーと同じ風。そう、あの日もこんな冷たい風だった。よく覚えてる。こんな冷たい風が吹くぐらいだから、もしかしたらフラれるかもしれない。そんなこと思ってた。でも、そんなことなかったんだね。冷たい風もちゃんと私の味方をしてくれたんだね。ねえ、海野君と付き合う前の辛い想いや嫌な想いをしたのは、遠回りしながら片想いしたのは、神様が仕組んでくれたことなの…？

…ありがとう。オレも貝本さんのこと好きだった…

…今年に入ってから、なんか気になって…

安らかな海野君の声。やっと届いた私の想い。海野君の中で芽生え始めた私への想い。この言葉を聞くために色んな出来事があった。

息が出来ないくらいの辛い事もちゃんと耐えてきた。だから、今、海野君の彼女でいられるんだね。もし、バレンタインデーに海野君にチョコをあげることをやめていたら、私はどうなったたろう？きつと臆病な自分から抜け出せなかったと思う。

部屋の中、ベッドに寝転んだと同時に、ケータイが鳴った。

「もしもし？」

「もしもし？ 冴子？」

「沙智？ どうだった？」

「楽しかったよ。有森君ね、気を使ってくれて面白いこと言ってくれてすごく笑えたよ」

沙智の声から楽しかった事が伺える。

「それは良かった」

「早く有森君の彼女になりたいなあ…」

「大丈夫！ すぐなれるよ！」

「そうだよ。冴子にそう言ってもらえたら彼女になれる気がする」

「有森君に告られてOKしなかったら、私許さないよ」

「わかってる。ちゃんとOKします」

電話の向こうで沙智が笑ってる。

沙智、元気になって良かった。有森君とのデートで元気増したんだね。元氣印の沙智が落ち込んでたら、私どうしたらいいのかわからないもん。

「冴子は海野君とどうなの？」

沙智が急に話をふってくるもんだから、

「はっ？」

気を抜けた声を出す。

「とぼけちゃってー。ロマンチックしてんじゃないのー？」

「し、してないってば！ 私達は健全な交際してるんだからねっ！
」

思わず、大声で否定してしまう。

「私の知らないところで…」

「してない、してない！ もー、沙智ってば変な誤解すぎだよお」

「そんなことないと思うけど？」

「そんなことより沙智も両想いになってよ」

話を反らす私。

「はいはい。わかってるわよ」

ロマンチックかあ…。当分なさそうだな。それでもいい。海野君は部活が忙しいから、「付き合ってる感じはしねーけど我慢してくれ」って言うってたもんね。好きな人のために我慢は出来るって言ったら嘘になるけど、こればかりは仕方ないもんね。好きな人には好きなことをやらせたいもん。無理には好きなことを辞めさせたくないもんね。

私はケータイを切ってベランダに出て、星を眺めた。

私のハート、ほんのり色づいて高鳴った。

明日の風になれ

あつという間に三月になった。なんか、バレンタイン後は早かったような気がする。忙しかった二月も終わり、もうすぐで春になる。あれから、沙智は急いで有森君にチョコを渡した。有森君は「遅いバレンタインだな」ってテレ笑いしてた。返事は決まってるけどホワイトデーにちゃんと返事する。そう沙智に言っただって。

「冴子！」

海野君が私を呼ぶ。

「あ、海野君……」

「今日の数学と日本史のテストどうだった？」

「んー、まあまあだったかな。海野君は？」

「オレはバツチリ。オレは数学と日本史に関しては八十点以上が目標だしな」

海野君は自信満々に答える。

「海野君数学と日本史は点数いいもんね。羨ましいよ」

「そうか？ 数学は計算だけだし、日本史とか社会は覚えればいいだけだしな」

「そんな簡単に言うけど苦手な教科は上手いこといかないよ」
頬をふくらます。

「そうだよな。オレも英語と国語は苦手だしな」

今回の学年末テストは図書室で一緒に勉強したんだ。海野君で数学と日本史の教え方が上手くて、私ってば尊敬しちゃった。「今からどこか行くか？」

「うん。アイスクリーム食べたいからアイスクリーム屋さん行こうよ」

「お前、太るぞ」

海野君がコッソリと軽く私の頭を叩いた。

「いいの。海野君がいれば太ってもいいもん」
「はあ？」

海野君はわけがわからないような表情をするけど、私はお構い無しなの。

「早く行こうよ！」

そう言っと、私元気いっぱいに走ったんだ。

遠回りだった私の恋。好きになってはいけない。好きになるのはやめよう。そう思った時もあった。そんなことなかったんだね。海野君と出逢ったこと。海野君を好きになったこと。無駄にしないようにしよう。

もし、海野君と出逢わなければどうなってただろう？ 海野君以外の男の子と出逢っていたらどうなってただろう？ 思うことはあるけど、今は海野君じゃなきゃダメなの。今のこの想い、大切にしよう。

「お前、食べるの遅い」

アイスクリームを食べ終わった海野君が、私を見ながら言う。

「海野君が食べるのが早いんだって」

「遅くてもいいか。そういえば、冴子に言っておかなくちゃいけないことがあるんだ」

「……？」

「有森と磯部さんの事なんだ」

「どうしたの？」

「実はな……」

真剣な表情の海野君。

何か会ったのかな？

「あの二人、恥ずかしがってデートしねーんだ。もう一度、デート設定してやってくれよ」

「いいよ」

「じゃっ、頼んだ」

海野君は真剣な表情から笑顔になった。

あの二人が付き合うまですぐそばまでやってきてる。ただ、勇気がないだけだよね。

夜、早速沙智に電話してみたの。

「デートしなよー」

「で、でも…っ」

「もー。両想いだから大丈夫よ。いけるってば。進展のないカップルだな」

「何が進展のカップルよ。まだカップルじゃないよー」

沙智が電話の向こうで顔を赤くしながら言ってるのがよくわかる。

「もうすぐでカップルになるんだからね。チャンスを逃しちゃうダメよ、沙智」

「わかってるよ」

「沙智、逃げたらダメだよ。逃げたら後悔しちゃうんだから…」

「ありがとう、冴子」

沙智はビックリしたみたいだったけど、私は精一杯沙智に伝えたい事を言った。

逃げたら後悔する。必ず上手くいく恋なんてない。だからこそ後悔もしたくないし、諦めたくない。上手くいかなくても頑張りたいもんね。

三月十四日、ホワイトデー。私と沙智は、海野君と有森君からそれぞれお返しをもらって、晴れて沙智と有森君はカップルになったんだ。お返しの包み紙を開ける沙智をいとおしそうに見つめてた有森君。そして、二人はデートするって言って、駅のほうへと向かった。

「二人、カップルになって良かったな」

海野君は嬉しそうに笑顔で言った。

「そうだね。安心したよ」

「オレ達も有森達に負けなくらいのカップルにならなきゃな」

「うん。学校一仲のいいカップル…なんてね」

「ハハハ…それいいな」

「でしょ？ 沙智達は第二のカップル」

「学校一のカップルじゃなくてもオレ達らしくいこうぜ」

「そうだよな。私達らしくいこうね」

私は海野君に微笑みながら言う。

片想いだった時の私。両想いになった瞬間の私。そんな自分を好きになりたい。自分を褒めてあげたい。片想いの時、海野君がいなければ頑張らなかつたと思う。石水さんだって転入してこなければ何もなかつた。

頑張った分だけ結果がでるって言うけど、恋だけは通用しない。そう考えてたから恋で頑張ることはしなかつた。頑張らなきゃ、好きな人が取られちゃうんじゃないか。ずっと思ってた。石水さんという恋のライバルが出来るまで、頑張るフリを必死にしてた。“フリ”をすることは辛いだけで、結局何も出来てない。しんどいだけだもん。そう気付いたのはいつからかわからないけど、石水さんが転入してからバレンタインまで私頑張ったんだ。

私達の恋は動き出す。この先、辛いことがたくさんあるかもしれない。私達は頑張ってみせる。出来るとこまで…。

明日は明日の風が吹く。嫌なことがあっても明日の風になれ――。

ちよっぴり不公平

学年末テストも思つて、気分はすっかり春休み状態。今日は終業式。
「来月から二年だねー」

暖かい風が吹く中、沙智が伸びをしながら言う。

「ホントだね。ちゃんと進級出来て良かったよ」

「そうだね。進級出来なかったらどうしようって感じだったけど、
無事に進級出来て一安心だよね」

私と沙智は、いつもの帰り道を歩きながら話す。

「それにしても、海野君と秀明の部活がなかったら四人で一緒に帰れたのにね」

「うん。最近、海野君と一緒に帰ってないんだ」

私は口をとがらせる。

「もー、そんな顔しないの」

そう言いながら、沙智は私のほつたをつつく。

「沙智はいいよね。沙智が有森君に帰りたいって言えば、必ず有森君帰ってくれるし…。海野君なんて部活ばかりだよ」

「仕方ないよ。海野君は次期部長って言われてるんだから…」

「次期部長かあ…。一日くらいは部活から離れてくれたらいいのに…」

ため息まじりの私。

「次会えるまで我慢だよ。ねっ?」

「そうだよね」

ちよっと不安を抱えながら頷く。

「よしっ! 今からケーキ屋さん行こうよ」

「え?」

「ケーキ屋さん行つて、ケーキ食べると冴子も元気になれるんじゃない?」

沙智は笑顔で言う。

そう言われると辛いな。当たってると言えば当たってるからね。

「うん…じゃっ、行こっ！」

元気よく走り出す私。

「冴子、待ってよ！」

沙智も走り出して、私の後を追いかけた。

「冴子、サクランボのタルト食べてみようよ」

カウンター前で沙智が、サクランボのタルトを指差して言う。

「おいしそう。サクランボのタルトのセット、二つ。私はレモンテイー」

「私はカフェ・オレで」

支払いを済ませて、席で待つ私達。

「冴子、いつまでもそんな顔しないでっ。私まで辛くなるじゃない」

「うん…」

そばにいないから不安になる。そばにいた時の嬉しさは二倍に膨らむ。何度も心の中で、一緒に帰りたいって呟いていても言葉にしないや伝わらない。

「明日にでも“会いたい”って言うちゃえば？」

「部活だっって言われちゃうよ」「辛いことは一人で抱え込まない。

そうでしょ？」

「そうだけど…」

「クラスでも喋らないし、どうすんのよ？」

「どうって…」

言葉につまってしまう。

「見てるだけなんて片想いの時と同じじゃない」

「思いきって、会いたいって言うてみようかな？」

「グググシ悩んでないで素直にならなきゃ、だよ」

「沙智…」

「恋なんて二人でするものなのに…」

沙智はクスクス笑いながら言う。

「沙智ってば笑わないでよー」

「ゴメン、ゴメン」

沙智は笑いながら謝る。

そうやって沙智と話しているうちに、サクランボのタルトのセットがやってきた。

サクランボのタルトを一口ずつ口に運んでいく。サクランボが口の中に広がっていく。私の不安まで溶けていく。

「冴子、元気になったんじゃない？」

「そうかなあ？」

「何かあつたら言つてよ。相談にのるから…」

「ありがとう」

ニツコリ笑顔を作る私。そして、窓に目をやる。

窓越しに仲のいい私達と同じ制服のカップルが歩いている。そんな光景を見ると、不意に泣き出しそうになる。

「会いたい」簡単に言えたらいいのに…。一度断られると不安になる。私だつてワガママばかり言えない。海野君、サッカーが好きだから、サッカーをやらせてあげたい。だけど、サッカーばかり夢中になってる海野君は私のこと忘れてる。それでも「サッカー部のマネージャーになりたい」って言ったことはあつたんだよ。だけど、「今マネージャーは二人いるからいらねー」って海野君に言われちゃった。あとで他の友達に聞いたんだけど、マネージャーの一人は同じ学年の子で海野君の事が好きらしい。しかも、私と同時期に好きになって、海野君に色々アタックしてるって言つてた。

…海野君に色々アタック…

私と全く正反対だね。私なんて全然いなくて付き合つてて、その子は積極的にアタックして付き合えない。なんか、切ないよね。

でも、積極的にアタックしてる子がいるなら私だって少しはヤル気がする。

窓越しのカップルみたいに、私と海野君も今よりもっと仲良くならなきゃ。私からいかなきゃ。待ってても仕方ないもんね。言わなきゃわからない。メールでもいいから、海野君に自分の気持ちを伝えなきゃいけないよね。自分の中でためこんでいる想いを、伝えなきゃ。

「ただいまー」

元気よくドアを開けて家の中に入る。

あれからずっと沙智と喋ってて帰るのが遅くなっちゃった。

「冴子、おかえり」

ママがキッチンから顔をだす。

「パパ、帰って来てるんだ？」

私は玄関に置いてあるパパの靴を見て言った。

「そうよ。冴子、パパが話あるみたいだから居間においで」

ママに呼ばれて、居間に向かう。

なんだろう？ ママの表情が深刻そうだったけど…。なんだか、嫌な胸騒ぎがする。

居間に向かうまでの短い道のり。こんな短い時間で色々な想いが交差していく。

「おっ、冴子、おかえり。ここに座れよ」

パパはママ同様深刻そうな表情をしてる。

「実はね、四月から冴子の学校に赴任することになったんだ」

そう言うと、パパは深刻そうな表情から笑顔になった。

「え？ ホントに？」

「うん。まだ正式に決まってるじゃないけど、冴子の学年に行くかもしれ

ないんだ」

「私の学年に…？」

「そうだよ。当たり前だけど、クラスも決まってるじゃないけどな」
嬉しいそうに答えるパパ。

どうしよう…。私、まだ言っていないんだよね。海野君と付き合っていること。もしかしたら、私の学年に来るかもしれないなんて…。

私のパパは学校の先生で、教科は体育なんだ。部活はサッカー部の顧問をしてる。自分の好きなスポーツだから担当してるんだよね。結構、生徒からは好かれてるみたいなんだ。

「冴子…？」

ママが私の顔をのぞきこむ。

「何か心配事でもあるの？」

「ううん、違う」

笑って否定したけど、ホントにどうしよう…。

「今日の午後に冴子の学校に行ってきたんだ。冴子の学校は環境のいい学校だな、ホントに冴子をこの学校に入れて良かったなって思ったよ」

嬉しそうに話すパパ。

「冴子の担任になればいいわよね」

「そうだったら光栄だけどな」

パパとママの嬉しそうな会話。その反面、どうしたらいいのかわからない私。言わなくてバレたら…きっとパパは怒る。今言ったら許してくれそうな気がする。

パパは私が男の子と仲良くするのを喜ばないんだ。娘の私を心配してるからなんだけど。中学の時に、仲良かった男の子を家に連れてきた事があって、その時パパにこっぴどく怒られた。それ以来、仲良くしてる男の子事が言えなくなってる。だから、海野君と付き合ってること未だに言えてない。

「クラスっていつぐらいにわかるのかな？」

恐る恐る聞いてみる私。

「四月になればわかると思うよ」

「まだ早いよね」

「そうだなあ。三月だもんな」

「赴任のお祝いで、今日はご馳走ね!」

ママははしゃぎながらキッチンに行く。

ママってばはしゃぎすぎだよ。

「江海、今日はいつもより美味しい物を作ってくれよ!」

はしゃぐママに、パパが言う。

仲いいな。私と海野君は、パパとママみたいに公認の仲になるのかな? なんて、遠い目でパパとママの姿を見ながら思っていた。

言えない気持ち

春休みも終わって、あつという間に新学期になった。

パパに海野君と付き合ってる事は言ってない。迷ってる間に新学期になっちゃった。ホントにどうしたらいいんだろう。春休みも海野君と連絡取ってないし、会ってない。

今日は久しぶりに会うんだよね。きちんと会いたいって言えば良かったな。それとも、会わないほうが良かった？ ううん、会わないほうが良かったなんて思ったらダメだよ。冴子、自分からいかなきゃいけないんだよ。きちんと会いたいって決めたじゃない。いつまでも悩んでたらダメなんだよね。

新学期当日、新しい気持ちで正門をくぐる。

体育館横に新しいクラスの表が貼ってある前に、人ばかりが出来ている。

「冴子っ！」

沙智が私を呼ぶ。

「沙智、おはよう」

「クラス替えの表、見た？」

「ううん。今来たばかりだから…」

「早く早く」

私は沙智に引つ張られて、前にいく。

「とりあえず、クラス替えの表見てよ」

沙智に催促されてクラス替えの表を見る。

私の名前、二年D組に書いてある。

「私、D組なんだ」

「そうよ。私もなんだよ。男子の欄も見てよ」

沙智に言われたとおり、男子の欄も見てみる。

男子の名簿の二人目、海野享平って書いてあった。

「あ、海野君の名前…」

「同じクラスなんだよ、冴子」

「沙智、有森君の名前ないけど…?」

海野君より前にあるはずの有森君の名前が見当たらない。

「秀昭はC組。隣のクラスなの」

「そっか。でも良かった。海野君と同じクラスで…」

完全に安心しきってる私。

「安心するの、早いつてば、冴子」

「え…?」

「前にサッカー部のマネージャーで、海野君にアタックしてる子がいるって聞いたでしょ?」

「うん、聞いたけど…」

「いるのよ。同じクラスに…」

「え?!」

思わず声をあげてしまう。

サッカー部のマネージャーの一人と同じクラスだなんて信じられないよ…。どうしよう…。

「どの名前の子なの?」

「えっとね…岡崎良子って子だよ。冴子の前じゃない。ついでに言うと、石水さんのライバルみたいよ」

「そうなんだ…」

あまりにもショックで、急に不安になる。

海野君と沙智と同じクラスになったのは嬉しいけど、また恋のライバルと同じクラスなんて…。これ以上、恋のライバルと張り合うのは嫌だよ。もう疲れちゃったよ。今回は石水さんじゃない女の子。岡崎さんという女の子。こんな中でやっていけるかな? 大丈夫かな?

二年D組、担任は誰だろう? パパじゃないことを祈るけど…。もし、パパだったら海野君と付き合ってる事、言わなきゃ。いつまで

も黙ってちゃダメなんだよね。

体育館に私の学年がクラス事に並んでる。

今日から二年生。一年前と違う。この一年で私成長したよ。恋の切なさや辛さ、人を思いやる気持ち。色んな感情を学んだ。ポンポン。

誰かが私の肩を叩く。振り向くと、海野君が立ってた。

「う、海野君?!」

「久しぶりだな」

「そうだね」

嬉しくて声が震えてる。

「同じクラスで良かったよ。冴子、仲良くしような」

「うんっ!」

「おーっ、元気だな。今日、デートしよう」

海野君からの突然の提案に、キョトンとする私。

「なんだよ? デートしたくねーの?」

「ううん」

慌てて首を振って否定する。

その時、学年主任が前に立った。

「じゃっ、またあとでな」

そう言っと、海野君は前に並んでいった。

二年D組の教室、教卓の前に担任が立って名前を書く。

担任はなんとパパなんだよね。

体育館に戻る時に、沙智と海野君には言っておいた。二人共、ビツクリしてた。

パパのクラス。これで決定的になった。海野君と付き合ってる事、パパに言わなきゃ。

「冴子、朝学習どうする？」

最初のホームルームが終わって、朝学習の申し込み用紙を持って私の席まで来た海野君。

「考え中だよ」

「オレは受けないつもりだけど、冴子が受けるなら受けようと思っ
てたんだ」

「来週中までに受け付けてるみたいだしね」

「そうだな」

二人の会話が教室に響く。

私達二人の他に、女子三人とパパがいる。

これでバレてるよね。ちゃんと言わなきゃいけないんだけど、言わなくてもわかるかな。

「冴子？ ボーッとしてどうした？」

「あ、うん。帰ろう」

そそくさに私は海野君と教室を出て行った。

さつき教室でのパパ。なんか少し怒ってた。そりゃ、そうだよね。海野君と付き合ってる事言っていないし、自分の娘が男の子と仲良くしてるんだもん。それに、私の下の名前呼び捨てにしても。だけど、怒ってる瞳の中にはほんの少しだけ悲しい瞳をしてた。その理由はなんとなくわかったけど…。一体、パパの悲しい瞳の中には、
どういうふうに私達が写ってたんだろう…？

「あのさ、冴子」

「何？ 海野君？」

「そろそろ海野君って呼ぶのやめてくれない？」

「え…？」

「オレ達付き合ってるんだから名字で呼ばなくていいと思うんだよね」

真剣な表情の海野君。

「でも、急に…」

「でも、じゃないよ。オレは冴子に下の名前で呼んでもらいたいんだ」

いつにない真剣な海野君。

私のこと、ちゃんと想っててくれてるんだ。よく伝わってきてる。

「ちゃんと“享平”って呼んで欲しい」

海野君の言葉に、コクリと頷く私。

頷くことしか出来なかったのは、声に出して返事するとホントにしなきゃいけないから。頷いた時点でホントにしなきゃいけないよね。

「じゃあ、今日は“享平”って呼んでくれるまで、冴子を帰さないことに決めた！」

真剣な表情からいつもの笑顔になる海野君。

「え〜つつ、そんなの嫌〜」

「今、頷いたもんねー」

「もー、イジワルー」

「イジワルじゃないよ」

優しい声の海野君。

「それに、冴子のお父さんが担任だなんて光栄だな。付き合ってる事認めてもらえるかな？」

「大丈夫！ 私がなんとかするからっ！」

「そっか」

そう言つと、海野君は黙ってしまふ。

なんとかする。強がり言つちやっただけ…。ホントは大丈夫なんじゃないの。パパに認めてもらうこと、凄く凄く不安なの。今、挫けそうなの。胸いっぱい不安の波が押し寄せてるの。

「冴子、不安なんじゃねーの？」

私は目を丸くしてしまう。

「ホラ、そんな顔して。全然、大丈夫って顔してねーよ」

不安な私に、海野君は笑ってくれる。

「そんなことないよ」

「無理すんなって！　すぐに認めてもらうのは難しい事だから……」

そう優しい笑顔で言ってくれるんだけど……。ヤダ……海野君のその笑顔に挫けてしまいそう……。

「さっ、早くオレの下の名前呼んでよ」

「……」

どうしよう。色んな想いが交差してる。

「……享平……」

消えそうな小さい声で呼ぶ。

「声小さいな」

「そ、そんなぁ……」

「いいよ。一度、呼んだら慣れるしな」

「そうだね」

海野君。うつん、享平は私達の事をパパに認めてくれるか、凄く心配してくれてる。今まで内緒にしてたから、パパに怒られるのはわかってる。私の頭の中、さっきのパパの怒った瞳が回ってる。

「冴子のお父さんってどんな人？」

「優しいよ。私の事、理解してくれるもん」

「やっぱ、怒ったら怖いよな？」

「怖いよ。特に男の子と仲良かったら……」

「そうなんだ。もしかしたら、オレと付き合ってる事、認めてもらえないかな」

享平は少し遠い目をする。

「大丈夫だよ。何度も話せばわかってくれるから……」

「ホントに？」

「ホントだよ」

「見かけによらず厳格なんだな。パツと見は優しそうな感じはするけどな。どこでも娘が男の子と付き合ってたら最初に認めるほうが難しいよな」

「そだね。パパだって人間だからわかってくれるよ」
私と同じ事を思っ享平。

いつか、パパに認めてくれるような、ホントの恋人同士になれるように――。

不安な気持ちを抱えている私は、享平の横顔を見つめながら思っていた。

私じゃない女の子

新学期が始まって一週間、パパに何も聞かれなかった。

私からも何も言っていない。多分、パパも聞きたくなんだと思う。私達の関係認めたくないんだと思う。それにあの日からパパは私と顔を会わせようとしない。声もかけようとしない。朝はパパに早く起きて、八時前には家を出る。一体、どうしたらいいの…？ 享平と付き合ってる事言えば良かったの？ 沙智だって言ってた。

「他の先生が二人の事を貝本先生に話してたよ」そう教えてくれた。他の先生に聞いたから敢えて聞かないんだね。今の状況からすると、絶対許してくれないはず。なんとなくわかる。

思い出す。パパの怒ってる瞳の中の、ほんの少しの悲しい瞳。ぐるぐると回り出す。切なくて苦しくて胸がしめつけられる。その胸のしめつけが、小さな傷になる。どうして早く言わなかったんだろう？ そう思う思いが駆け巡る。

享平、大丈夫かな？ パパはサッカー部の顧問なんだよね。享平一人だけキツい練習してないかな？ 一人だけ取り残されてないかな？ 色々考えちゃう。聞きたいけど聞けない。ホントに心配になる。ジメジメした私の心の中。いつになったら晴れるんだろう…？

「冴子、大丈夫？」

「あ、沙智…」

放課後、何かしようってわけじゃないけど、グラウンドで沙智と一緒にいる。

「顔色悪いよ？」

「大丈夫よ」

無理して笑って見せるけど、沙智にはバレバレ。

「海野君の事でしょ？」

「え？」

「言わなくてもわかるんだから……」

「そうだよ。あのね、私、パパに享平と付き合ってる事、まだ言っていないの」

「マジで？」

「ホントだよ」

「それで？」

「バレてるからパパ怒ってるの」

「そりゃあそうでしょうよ。なんで早く言わなかったの？」

「言いづらかったんだもん。パパ、私と顔を合わせてくれないんだ」

「ヤバイよ。早く言わなきゃ」

「……だね。今日にでも言うつもり」私の決心は固い。ホントに今日言う。

「貝本先生でサッカー部の顧問だっけ？」

「そうだよ。凄く心配だよ」

「そうよね。海野君、無視されてるかもしれないもんね」

「うん。なんとなく享平だけ男子の中で態度が違うような気がするんだよね」

「私には見た目はわからないけど、それはあり得るかもね。あ、海野君だ」

沙智はグラウンドを歩く享平と岡崎さんを指指す。

でも、隣には……同じクラスの岡崎さん。享平は私には見せた事ないような笑顔で、なんだか、とても仲良さそう。

「海野君！」

沙智が元気よく手を振って享平を呼ぶ。

二人は私達二人の席に近付いてくる。

「冴子と磯部さん、何してんだよ？」

「話してたの」

「仲良いよな」

そう言う享平の表情、ちよっぴり切ない。

「そういえば、貝本さんて享平君の彼女だっけ？」

彼女…岡崎さんが私の隣に座ってから言う。

「そうだよ。冴子、前に言ってただろ？ サッカー部のマネージャ
ーしてるって…」

「あ…うん…」

ボ―ツとしてた私は、慌てて返事する。

「二人が付き合ってるって聞いてたけど、貝本さんて大人っぽい人
だと思ってた」

「……」

岡崎さんの言葉に何も言えない。

「享平君には大人っぽい女子じゃないと似合わないかなって思う」
髪をかきあげながらの岡崎さん。

大人っぽい女子じゃないと似合わない…。それは、私が子供っぽい
ってことだね？ そういう意味になるんだよね…。

「そんなことねーよ」

さっきの笑顔の続きを岡崎さんに向ける。

「私、トイレ行ってくるね」

突然、沙智が立ち上がる。

「さ、沙智…」

「すぐに戻ってくるって。三人で喋っててよ」

沙智は私にウインクすると教室を出て行った。

「良子、昨日言ってたCD持ってきてくれよ」

沙智の姿を見届けた後に、享平は笑顔で話の続きをする。

「いいよ」

「あの曲、詞が好きだな。共感出来る」

「私も。詞の気持ちがよくわかる曲だな」

「まあな。若者にはわかるんだろうな」

「そつみたいだね」

二人の会話、とても弾んでる。享平ってば岡崎さんのことを下の名

前で呼んでる。付き合ってる私も下の名前で呼んでくれてるのにね。それに何より私というより楽しそうにしてる享平。付き合ってる私と付き合ってる岡崎さん。享平にとっては同じなんだね。

二人の会話に入れなくて、思わず下を向いてしまう私。

私の鼓動、とても速く感じる。不安だって気持ちのせいもある。今にも泣き出してしまいそうだよ。泣いたらダメ。泣いたら二人はビツクリしちゃう。そして、岡崎さんに言われちゃう。「泣き虫なコ似合わない」そう言って、バカにされちゃう。だけど、二人の会話が耳に入ってくる度に、涙が溢れそうになる。早く二人共、部活に戻ればいいのに…。私の心の中、とても混乱してる。ホントに泣き出しそう。自分でもよくわかる。ダメだよ、泣いたら…。弱いコになっちゃう。何度も自分に言い聞かせる。

「私、部活のほうに行くね」

「オウ！ オレ、冴子と少し話してから行くな！」

「早く来てね」

優しい声の岡崎さん。

享平の事、好きだと裏付けてるようで…。

「二人で仲良くね」

岡崎さんは私達に軽く手を振ると、ゆっくりとした歩き方でグラウンドに向かった。

「オレ、一緒に体育委員してるし、良子は一年の時からサッカー部のマネージャーしてるし、いつの間にか仲良くなったんだ。マネージャーしてくれてる時から仲は良かったけど、今年同じクラスになつて、より一層仲良くなったって感じかな」

嬉しそうに話す享平。

そんなに嬉しそうに話さないでよ。

「良子ってクラスの中で中心的で明るいし、優しくて大人っぽいし、みんなから人気あるんだぜ？」

ふうん…享平がそんなふうに思っても仕方ないよね。だって、仲良いんだもん。

「…冴子？」

私の様子がおかしいことに気付く享平。

「……」

「どうした？」

「……」

「冴子……？」

享平が心配してくれる。

そして、私の瞳から涙が溢れる。

ダメ。泣いたらダメなのに……。「冴子、どうしたんだよ？」

「ゴ、ゴメン。なんでもない」

慌てて涙を拭う。

でも、拭っても何度も涙が溢れちゃう。止まらないよ。

「冴子、泣いてる理由、言ってみるよ」

首を左右に振る私。

「ホラ、言ってみるよ」

「…あのね…辛かったの…」

「え？」

「…享平の事…好きだから…岡崎さんと二人で話しているとこ見るの…嫌だったの…」

私の言葉にちゃんと耳を傾けてくれる。

「もしかして、ヤキモチ妬いてた？」

私はコクリと頷く。

「大丈夫。オレは冴子に心配かけるようなことはしない」

「……」

「それに冴子は初めてオレにヤキモチ妬いてくれた。冴子がオレの事好きかどうかとても不安だった」

突然の優しい言葉。享平も不安だったんだ。私と一緒にだね。

「不安な気持ちにしたのは悪かった。冴子の気持ちはよくわかったから泣かないで欲しい」

真剣な表情の享平。

私は頷くことしか出来なかった。

「ただいま」

パパが帰ってきた。

私は急いで玄関まで行く。

「パパ、話があるんだけど…」

「話することなんてない」

それだけ言っていると、居間のほうに歩いていくパパ。

「お願い。私の話、聞いてよ」

必死の私のお願い。パパってば無視しちゃって、私の話に耳を傾けようとしなない。

「パパってば！」

強い口調の私。

その様子をただならぬ事だと思ったママは入ってくる。

「冴子の話、聞いてあげたら？」

「……」

「冴子、言っちゃっていいわよ」

「うん…。あの、実は…」

さあ、早く言わなきゃ。

「海野と付き合ってる事だろ？」

「なんでわかったの?!」

「それくらいわかるさ」

サラリと言ってみせるパパ。

やっぱりバレてたんだ…。

「いつも言ってるだろ? 男の子と付き合ってはいけないと…。内

緒でコソコソと付き合っでどういう事なんだ？」

険しい表情で言ったパパ。

「私から好きだって言ったの。そしたら、享平がOKしてくれた」

「享平？ 呼び捨てにする仲なのか？」

「そうよ。ダメなの？」

「ダメだなんて言っでない。ただ冴子の事が心配なだけだ」

「パパが私の事心配するのは勝手だよ。私だっで好きな人の一人はいてもいいじゃない！！ それさえ許されないっでいうの？！」

気が付いたら大声でそう言っでた。自分でもビックリするくらいに叫んではた。

「私は享平が好きだし側にいたいもん！ パパだっでママと離れるのが嫌なことわかってるくせに！！ 好きな人と離れる辛さわかってるくせに！！」

私の瞳から涙が溢れてる。

私の言葉に、パパは何も言い返せないでいる。

「私だっで…好きな人の側にいたいんだもん…」

「健吾、冴子が付き合っでる事認めてあげてよ。冴子にだっで好きな人が出来るのは自然なことなんだもん」

ママも一緒になっで説得してくれる。

「私達もそうだっでたじゃない。高校生からの付き合いだけだけど、私が色んな事言われても好きだっで言っでくれたじゃない」

「それとこれとは違っで」

「何言っでんのよ。好きな人同士で想いあっでてるんだしいいじゃない。私達も同じじゃない」

ママの優しい口調。

「考えておく」

パパはそれだけ言っで、居間から出で行っでた。

そして、ママは泣き顔の私を抱きしめてくれた。

認められない気持ち

翌日の放課後、私と享平、沙智と有森君のWデート。

この前、沙智と二人で来たケーキ屋さんに来ただけで、私以外の三人は仲良く喋ってる。私はというと、窓の外を眺めてばかり。

今日もパパは八時前に学校に行っちゃった。昨日、私、パパにキツイこと言っちゃった。私の言ったことに気にしてる？ それとも、怒ってる？ ママみたいに優しく言えば良かった？ あんなにキツイこと言うつもりじゃなかったのに…。今から後悔しても遅いってこと…わかってる…。私ってばいつからあんなにキツイこと言うようになったんだろう。ちよつと前まではパパの言うことに聞いてた。それなのに、いつから…？

いつまでもパパの言うことを聞いている私じゃいけない。私自身の意思で、自分の思いを言わなきゃいけないんだ。時には、昨日みたいに逆らったり、時には、他人の意見を聞く。そうしなくちゃ、冴子。いつまでも子供じゃいられないんだから…。もう一人の私が呟く。

「…冴子？」

「え…？」

「え…？ じゃないよ。元気ないよ？」

沙智が心配してくれる。

「さっきからボーツとしてる」

有森君も指摘する。

「そ、そうかなあ…」

ジュースを飲みながらごまかす私。

「ボーツとしてたのは凶星っぽいな。顔に出てるし…」

「享平まで…」

「最近、ボーツとし過ぎじゃねー？ やっぱ、担任が自分の父親だから？」

有森君、すごくスルドイ。私の考えてること、ちゃんとわかってる。
「まあ、そんなところかな。アハハ…」

当たってると思うながら、顔をひきつらせて笑ってみせる。

「そんな無理した顔して…」

「無理なんか…」

そう言いかけた私の瞳に飛び込んできたのは…パパだった。

「冴子？」

享平が私の制服の袖を引っ張る。

「あれ…パパ…」

私が指指す方向に、三人は目をやる。

「ホントだ。貝本先生だ」

「こっち見てるよ」

パパはケーキ屋さんの窓際にいる私達に気付いて見てる。

どうしよう…。昨日、キツイことをパパに言っただけなのに…。

今は会いたくない。

でも、パパはケーキ屋さんの中に入ってきて、私達の机に向かってきてる。

今にも逃げ出してしまいそう。

「どいて、享平」

素早くカバンを持って、イスからおりると、逃げる体勢の私。

「ちよつと、冴子、どうしたのよ？」

沙智が言ったのと同時に、ガシツとパパが私の腕を掴む。

「い…いたっ…」

「逃げることないと思うけど…？」

「そつだよ」

享平もパパと同意見だと言わんばかりに頷く。

私は仕方なく席に戻る。

「貝本先生、何してるんですか？」

「駅前の見張りだ。最近、バスや電車のマナーが悪いと苦情がきてるんだ」

「そうなんですか。先生も大変ですね」
「そうだな」

パパはため息をつく、と、「コーヒー」をオーダーした。

「先生、俺達のこと認めてくれないんですか？」

突然、享平が真剣な表情で言った。

「急にどうしたんだ？ 海野」

「噂や冴子から聞いてると思います。俺達、ちゃんとした健全な付き合いをしてます」

「付き合ってどれくらいだ？」

「バレンタインの時だから、もう二ヶ月になります」

きつちりと答える享平。

急なことで、私達三人は啞然。

「享平……？」

「先生の事は冴子から聞きました」

「それでちゃんとした健全な付き合いをしている。そういうのか？」

「そういうつもりで言いました」

とても険悪なムードになる。

「はつきり言っと、認めてはいない」

「二人は仲良いですよ。付き合って日数は少ないけど、先生が思ってる程でもないですよ」

沙智がフォローしてくれる。

「だから、ちゃんと認めて欲しいんです」

「二人の行動を見てからだな。その話は終わりだ。冴子、帰ってきたら、パパの部屋に來なさい」

「うん……」沙智がフォローしてくれた事に感謝して泣きそうになりながらも返事した。

きっとパパの中では、気持ちが固まってるんだ。パパの中では、色んな気持ちでいっぱいなんだよね。私達を認めたくない気持ちと少し認めたい気持ち。色んな気持ちが交差してたと思う。パパとじっ

くり話し合わなくちゃいけないよね。

…認めてはいない…。

パパの声、ほんの少しだけど戸惑ってた。戸惑うパパの声。そんなパパの声、初めて聞いた。いつもならちゃんと意志が決まってるハズなのに…。沙智が言っただけいもあるんだと思う。それなのに、なんか変だよ。

「海野の事だが…」

パパの部屋でパパが重い口を開く。

学校の資料とかたくさん置いてある。

「パパの気持ちは、ちゃんと決まってる」

「……」

「まだ二人を認めるわけにはいかない」

「そっか…」

ポツリと呟くと、下を向いてしまう私。

パパが下した決断、わかってた。私の心のどこかで認めてくれる答えを求めてたのかもしれない。例えば、それが無理でも、「今まで態度が違ったけど、これから他の男子と同じように接するよ」って言うて欲しかったのかもしれない。

「パパはどうして享平だけ態度を変えるの？」

「冴子と親しい関係だからだ」

「サッカー部でもキツイことしてるんじゃない？」

「それはない」

きっぱりと否定するパパ。

「ホントは享平のこと嫌いなんですよ？」

「そんなことはない。パパは教え子に好き嫌いはない」

「じゃあ、なんで？　なんで享平だけ？　享平にもちゃんとした態度で接してよ」

私の訴えにも関わらず聞き入れてくれない。

「当分の間は無理だな。パパが認めたらの話だ」

「やっぱり態度変えてるんじゃない！　そんなの酷いよ！　認める気もないくせにー！」

激しい口調になる私。

「…もういいよ…。パパが認めてくれないならもういいよ…」

そう言っと、私は立ち上がった。

と、同時にママが入ってきた。

「ママ…」

「ホントに頑固ね」

「何言ってるんだ。冴子を想うから認めないんだ」

「健吾、いいじゃない。昔は昔、今は今なのよ。冴子は普通に男の子と付き合いをしてるんだから…」

「普通に付き合ってるって言っても、親の知らないところで何してるかわからない」

パパは何を思ってるのか、ママの言うことにも全然聞かない。

「私は冴子の見方だからね。いくら、健吾の頼みでも認めないっていうのはしないからね」

「勝手にしろ」

「さっ、冴子、キッチンに行きましょう。頑固なパパ放っておいて、一緒にご飯食べましょ」

「…うん…」

小さく返事すると、私はママの後ろについて行った。

…親の知らないところで何してるかわからない…。

…勝手にしろ…。

もう、無理だよ。私と享平、ママや沙智や有森君がどう頑張ってもパパの気持ち動かないよ。簡単には認めてくれない。私はこれから

も男の子と付き合っていく中で、いつまでもパパに認められないのかな。

もし、高校生だったパパとママがもう少し遅くに出逢っていたら、私と享平は認められてたのかな？ 二人が高校生に出逢ったのは誰のせいじゃない。そして、パパが私の学校に赴任したのも誰のせいじゃない。全部、そういう縁なんだよね。

外は雨。まるで、私の心みたい。認めてもらえないから、私の心の中でも雨が降ってる。認めてもらえたら、私の心は晴れるの…？ ホントに晴れてくれたらいいのに…。

早くなんとかしなくちゃ。パパに認めてもらいたい。パパに内緒でコソこそ付き合いたくないもん。享平のためにも、みんなのためにも、私が頑張らなくちゃ。

仲良しになった二人

あれから数日が経った。私とパパの仲は相変わらずで、私達の事を認めてくれない。

早くに言わなかった私が悪いんだけどさ、娘の付き合ってる人の事で、いつまでも認めないってのもどうかと思うんだよね。早く認めてくれたらいいのに。ホンットーにパパってば頑固なんだからつつー！！　なあんてね、私もブーツとしてるわけにはいかない。どうしたら認めてもらえるか考えなくちゃ。

放課後、私はサッカー部が見える中庭で一人で座ってた。

「貝本さん？」

「あ、石水さん。今日、バスケ部は？」

「今日は休み。何してんのよ？　こんなところで……」

「見てのとおり、サッカー部見てるの」

「ああ…享平君ね。相変わらず、サッカー好きだね」

石水さんは私の横に座ってから言った。

サラサラの長い髪。パツチリした目。私と正反対の性格。ハキハキしてる反面、どこか持陰をつてる。

「そういえば、岡崎さんも享平君の事好きなんだっけ？」

「そうみたい。私、ビックリしちゃって……」

「岡崎さん、サッカー部のマネージャーだしね」

「……」

石水さんからサッカー部のマネージャーって言葉が出て、何も言えないでいる私。

「気にすることないんじゃない？」

私の気持ちを看透かしてか、石水さんは何気なく言った。

「そ…そうよね！」

わざと明るい声で言う。

「そうよ。貝本さんは享平君の彼女なんだし、いつも通りいいと思うよ」

「そうだよね…」

…気にしない…。この言葉に何度、助けられただろう…。

「私達、一年の時より仲良くなってるね」

「そうだね。一年の時は享平君の事で張り合ってたもんね」

石水さんは思い出すように言った。

「色々あったねえ。享平は岡田さんが好きだって言ってたし…」

「言ってた、言ってた。あの時、私、凄くショックだったんだよね」

「私もだよ」

「貝本さんも？ 一緒だ」

ニコツといつもの笑顔で笑ってくれる石水さん。

「一年の時はキツイ事ばかり言ってごめんね」

「いいの。石水さんがいなかったら、私…」

「……？」

「今の私はいなかった」

「そっか…」

しばらくの沈黙後、

「サッカー部が終わったら、差し入れなんてどう？」

「差し入れ…？」

差し入れか…。考えた事もなかった。マネージャーの岡崎さんがやってくれる。だから、余計にそんなこと考えた事なかった。享平は私からの差し入れして欲しいって思ってる？

「料理部に友達がいるから、少しお裾分けしてもらいに行こうよ」

「でも…」

「いいの、いいの。今日、料理部の活動日だから…」

そう言うと、石水さんは私の腕を掴んで、料理部のいる調理室まで行かされることになった。

プーン。

鼻につく甘い匂い。料理部の子達が料理してる。

今日はクッキーとプレーンマフィンを作ってる。ちょうど先生がいないから、私達こっそり入ってきたんだ。石水さんの友達からマフィン一個とクッキー二枚もらうことになったんだ。作ってる間、私は購買部で飲み物を買ってきたんだ。

今の私には、差し入れることで精一杯。ちゃんと享平にあげなきゃ。そういう気持ちでいっぱい。

「はい。これ持っていくのよ」

「うん、わかった」

「私はこれで帰るけどファイトよ、ファイト!」

「ありがとう、石水さん」

石水さんに散々頑張れコールを受けて、グラウンドに向かう。

午後六時半、サッカー部が更衣室に入っていく。それを見た私は急いで走っていく。

「享平!!」

更衣室に入ろうとする享平を呼び止めた。

「冴子、どうした?」

「あ…あのね…」

「ん?」

「これ、差し入れ」

袋に入れたマフィンとクッキーと飲み物を、享平の前に差し出す。

「差し入れ? ありがとう。スゲー嬉しい」

嬉しそうな笑顔で受け取ってくれる享平。

「海野君?!」

岡崎さんが呼ぶ声。

「岡崎…」

「なんで受け取るの?」

岡崎さんの問いかけに、困っている享平。

「なんでって…冴子はオレの彼女なわけだし、差し入れを受け取るのが普通だって」

きっぱり言ってくれる享平。

今にも泣きそうな岡田さん。

「そうだよな…。ゴメンね、海野君」

泣き出しそうな声で言うと、岡崎さんは走っていった。

「冴子、すぐに着替えるから待ってて」

「オッケー」

バイサインを享平に向ける。

…なんで受け取るの？…

岡崎さんの言葉が、私の頭の中でリピートする。片想いしてた時の私に似てる。石水さんに嫉妬してた私に似てる。岡崎さんの表情や気持ちや全て。なんか、岡崎さんの気持ちわかるような気がする。どこか期待してて、どこか嫉妬してる。

「美味しいよ」

「ホントに？ 私が作ったんじゃないのに…」

「それでも冴子の気持ちは伝わったよ」

「ありがとう」

お礼を言つと、深いため息をついてしまう。

「さっきのこと、気にすんなよ」

「あ、うん…」

気のない返事の私。

「大丈夫だって。冴子は心配しなくてもいいって、なっ？」

「そうだよな。それより早く食べてよ」

「オウ！」

気にすることないんだよね。私は享平の事を考えればいいんだよね。無理して岡崎さんの事、心配しなくてもいいんだよね。

「今日、練習キツくて腹減ってたんだよな」

享平は嬉しそうに話す。

「ちょうど良かったよね」

「凄いグッドタイミングだな」

「享平の場合はいつも練習キツいんでしょ？」

「まあな。でも、サッカー好きだし苦にはならないけどな」

「部長候補だもんね」

「え？　なんで知ってんの？」

目をパチクリさせる享平。

「噂で聞いてたし、沙智も言ってたよ」

「なあんだ。知ってたのかー？」

享平はガツクリしている。

「なあんだって何よ？」

思わず、頬をふくらませる私。「いや、部長になったら自慢しよう
かなって…。知ってたならいいか」

「別にいいのに…」

部長候補でも、部長候補じゃなくても、私は享平のサッカーしてる
姿が好きだよ。マネージャーになれなかったぶん、ずっと応援する。
ずっと側にいてあげたい。私は享平がサッカーしてる姿が自慢だよ。
遠いところからシュート出来る。相手が蹴ったボールを止めること
が出来る。享平のサッカーしてる姿、そのものが自慢になってる。
だから、部長になったからって自慢しなくてもいいんだよ、享平。

私と享平。恋人らしく…。そのぶん、辛いことや切ないことが増え
ていくけど、そんなこと気にしない。私、決めたんだ。辛いことが
あっても挫けないって…。そんなこと気にしても仕方ないもん。

「さっ、行こうか」

「うん、行こう」

暖かい風が私達の背中を押してくれる。

「今度、冴子の作った物が食いてーな」

「言ってくれたらなんでも作るよ」

「サンキュ」

「でも、難しいのはダメだよ」

「なんだよ、それ？」

夕日が綺麗なオレンジ色になりかけた頃、私達の会話だけが響いていた。

険悪ムード

翌日の昼休み、私と沙智と享平と有森君の四人で、学食で食べようって約束してたんだけど…享平は

「用事が出来たから無理になった」って言ったんだ。

サッカー部のことかな、なんて思ったけど、なんか違うつぽいんだよね。他の友達と約束したのかな？

「享平も来たら良かったのにな」

有森君が残念そうに言った。

「そうよね。用事が出来たって言ってたから、サッカー部のことかな？」

「多分な」

「海野君はサッカー部の期待の星だからね」

「羨ましいな」

沙智と有森君の会話、享平の話題。

「秀明、陸上部の部長にはなれないの？」

「オレは無理だな」

「えーっ、なんで？」

「オレはそんなにタイムが早くないんだよ」

「タイム、早くしてよ」

「早く出来たら、とっくにしてるよ」

楽しいな二人の会話。

そんな二人に、ため息の私。

享平が学食で食べるのを断ってきただけで、私の中ではすごい胸騒ぎ。二人みたいにサッカー部のミーティングのことだって、ずっと思ってたれば良かったんだけど、すぐに違うつて直感したんだもん。私の発想がすごいよね。でも、一緒にお昼出来なかった分、放課後がある。一緒に帰れるよね…。

「冴子、元気ないよ？」

ポーツとしてる私に、沙智が心配してくれる。

「あんまり食べてないみたいだし……」

有森君まで心配してくれる。

今の私には、二人の心配が苦しいよ。

「大丈夫よ」

「またまた……。享平がいねーからって食べる気ねーんだろ？」

「ハハハ……」

笑ってごまかしてしまう私。

「当たり前なんだ？」

「まあね」

そう答えると、深いため息を一つつく。

ホントに今日に限って食欲がない。私の大好きなカレーライスを頼んだんだけど……。やっぱり食べる気がしない。享平がいらないからっていうのもある。それよりもなんだか熱っぽい。風邪でもひいたかなあ。

「ねえ、ホント大丈夫？」

「うん……」

返事するんだけど、気のない返事。

沙智が私のおでこに手をやる。

「ちよつと、冴子、熱あるんじゃない？」

「……みたい。保健室行ってくる」

「私もついて行くこうか？」

「一人で行ける」

「……なら、あまり無理しないでね」

「うん」

私は残ったカレーライスの皿を持って、急いで保健室に向かうことにした。

中庭を越えて、隣の校舎にある保健室。熱があるせいか、長く感じる。

今日はついてないな。熱があるし…。実は朝から熱っぽい感じだったんだけど、学校に行ったら、なんとかなるって思っちゃったんだよね。学校に来てても熱下がらないのに、何考えてるんだろう。きつと、享平の顔が見たいから、とっさに体が休むより学校に行く事を優先したんだよね。

放送部が流している音楽が、校舎いっぱいに響く。今日の音楽は少し大人っぽい曲。

こういう感じの曲、好きだな。それにしても、さつきより余計にフラフラしてる。ヤバイなあ…。ちゃんと休めば良かったなあ…。大体、私って中学から無理ばっかしてるんだよ。中学の時に、体調悪いのに学校来たんだ。その日は体育祭の練習で猛暑の中、リレーの練習してたら、走ってる最中に倒れちゃって、そのまま保健室行きになっちゃったわけ。無理は禁物だって言うのに…。なんて思っていると、やっと中庭に着いた。

その中で綺麗な花が生けてある場所に享平と岡崎さんがいるのが見えた。

——あの二人…二度目のツーショットだ！！　また何か喋ってるんだ…。

「享平…」

弱々しい私の声。私の声に気付いてない享平。

これ以上、声は出ないのに…。

「享平…っ」

「え？」

振り向く享平。

少しキョロキョロした後、私に気付いた。

「あ、冴子…」

バツが悪そうな享平。

その表情が私の胸に突き刺さる。

「何してんの？」

「何もねーよ。ただ相談にのってるだけだよ」

ほんの少し口調のキツイ享平。

私、初めて聞いた。享平のこんなにキツイ口調。

なんで？ 享平がキツイ口調になるくらいに仲良いの？ 享平と岡

崎さん。私と享平よりもずっと恋人同士に見えるよ。

「冴子には関係ねーことだから…」

「そうよ。わざわざ入ってくることはないじゃない」

二人にそう言われると、何も言い返せなくなる。

不意にグツと唇を噛んでしまう私。

「な…何よ?! 二人して私をのけ者にするの?!」

気付いたらそう叫んでた。

「違うよ。今は相談にのってるから邪魔しないで欲しいんだ」

「何が相談よ! 私は…享平の…彼女…なの…に…」

段々、声が弱々しくなつて気が遠くなってくる。

あ…ダメ…。言いたいことたくさんあるのに…気が遠くなってくるよ…。

二人の親密そうな空気。享平は岡崎さんの相談にのれるような関係なの? 岡崎さんと仲良くしろなんて言わない。だけど、不安になる。岡崎さんと初めて会った時、享平は大人っぽい女子じゃないと似合わないって言われた。そう言われたから、享平も私の事子供っぽいつて思ってるの? 私が享平の事好きだって言ったから、嫌で付き合ってるの? そんなんじゃないよね。私の事好きだって言ってくれた。

さっきの享平のバツが悪そうな表情。キツイ口調。入り込んで欲しくないような雰囲気。もしかして、私達は別れることになっちゃうの? 別れる。そんなの嫌だよ。私の言った言葉で享平は私の事嫌いになつてる。別れようって言われる。ちゃんと覚悟を決めなくちゃ。辛いけど覚悟を決めなくちゃ。

……。

あれっ？ 私、なんでベッドで寝てるの？　なんか、体が重い。享平が私の顔をのぞきこんでいる。

「熱が九度五分あるって。そんな熱があるのに、学校来てたんだな」

「え、あ、うん……」

享平、怒ってる。

「授業は……？」

「もう終わったよ」

「ご……ごめんね。迷惑かけちゃって……」

享平に謝るけど、ホント泣きそう。享平の顔、まともに見れないよ。

「ホント迷惑ばっかだよな」

「……」

なんて言えばいいのかわからない。

「オレが良子の相談にのってんのに入ってきて、かと思えば、熱で倒れるし……。良子も怒ってたよ」

呆れ顔で呆れながら言う享平。

そんな顔しなくてもいいのに……。私ってホントにバカだよな。人に迷惑ばかりだし。保健室から逃げだしたくなっちゃう。

「俺達が話してる時は入りこないで欲しい」

「ごめん。でも、私、享平の彼女なのになんで岡崎さんばかりなの？　私と岡崎さんは同じ立場なの？　そんなにマネージャーの岡崎さんのほうがいい？」

謝った後に私の不満が一気に吹き出してくる。

「そんなんじゃないよ。良子とはただの友達だし、冴子が考えてるような関係じゃないって。それにさっきのはサッカー部の事で相談されてたんだよ」

享平は否定する。

「じゃあ……なんで呼び捨てにするの？　享平が岡崎さんの事、呼び捨てにすると不安だよ……」

どうしようもないくらい悲しみが胸に溢れてくる。

「友達だからって呼び捨てにするんだね。彼女の私と同じなんだね。同じクラスだけど、当分、二人で会わないほうがいいと思う」

「冴子…」

私が言った言葉に困惑している享平。

そして、私はカバンを持ってベッドから抜ける。

「まだ寝とけよ」

享平は二人で会わないほうがいいと思うと言った私に、慌てて止める。

「いいよ。もう大丈夫だから…」

「冴子!!」

享平は強く私の腕を掴む。

「い…いた…っ」

「ごめん。大丈夫か？」

私はコクリとうなずくと、小走りで保健室を出て行った。それは享平に涙を見られたくなかったから――。

仲直り出来るかな

熱が出で倒れてから十日、四日間休んで、学校に来て六日目。まだなんとなく体がダルイ。

気持ち的にも、学校に行く気がしない。

学校に行く途中、引き返そうとするくらい。

病み上がりのせいじゃない。六日間、享平とは一言も口を聞いてない。岡崎さんとは相変わらず仲が良い享平を見ると、どうすればいいのかわからない。私達、これで終わりなの…？　すごく最悪だよ。このまま終わるなんて嫌だよ。会わないほうがいいって言ったのは私からんだけど、このまま放っておくとマズイよね。

享平と話したいのは、やまやまだけど岡崎さんがいる。二人共、あのことで怒ってる。わかってる。わかってるよ、私が悪いってこと。

…当分、二人で会わないほうがいい…

私から言ったけど、やっぱり同じクラスだと顔を会わすし、嫌でも視界に入ってしまう。正直、この先、どうしたらいいかわからない。

「最近、享平と仲良くないな」

沙智と有森君と三人で話してたところに、突然、有森君が言う。

「そ…そうかなあ？」

笑ってごまかしたんだけど、二人にはバレバレ。

「ケンカしたの？」

「ううん、違うよお」

「でも、ここところ、二人の様子が変だよ」

沙智が疑いの目を向ける。

実は、熱で倒れた時の出来事を二人には話してない。

「全然、変じゃないよお」

そうごまかす私の瞳には、享平と岡崎さんのツーショットが映る。
このままでいいの？ 岡崎さんに取りられちゃうよ。享平を岡崎さん
にあげちゃうの？ 冴子、どうするの…？
「岡崎さんってば、海野君にくつついちゃって…」
「確かに。享平が好きだって有名だもんね」
「元気のないのは、あの二人のせい？」
「まあね」
「あまり気にしないほうがいいんじゃない？」
「そうだよ」

ホントの事、言えない。六日も話してない事。私が熱で倒れた日から、私達の関係がグクシャクし始めた事。
岡崎さんと仲良くしてる享平。そんな享平を遠くから見るとしか出来ない私。享平に近付けないのが、とてももどかしい。やっぱり二人で会わないほうがいいなんて言わないほうが良かったかな？ もう享平とは仲直り出来ないのかな？ 仲直り出来たら、強がりなんて言わない。自分が苦しい事はきちんと言う。そう決めた。だから享平と仲直りしたい――。

沙智と駅前のケーキ屋さんに来たの。私はショートケーキとミルクティー。

「ねえ、沙智は陸上部のマネージャーとか考えた事ないの？」
「突然…どうしたのよ？」

しみりとした私の質問に、沙智はビククリする。

「うん…ちょっとね」

「あるよ。でも、陸上部のマネージャーって大変みたいだからね」

「そつか…」

「海野君とケンカした？」

「まあ、そんなところ」

「ケンカは仲良くするためにあるんだよ」

「そうよね」

そう言いながらうつむいてしまう。

「海野君はきつと冴子の事わかってくれるよ」

「ありがとう、沙智」

「いいのよ。秀明も心配してるんだからね」

「ごめんね。二人に心配かけちゃって…」

「全然いいんだって。早く食べよう」

生クリームが私の不安も溶かしてくれる。二人が心配してくれてるから、早く仲直りしなくちゃね。

「このケーキ屋さん、美味しいよね」

100天満点の笑顔を沙智に向ける。

「元気になって良かった。私、冴子のその笑顔好きなんだ」

「沙智…」

「元気ない時に冴子の笑顔見ると、私も元気になれるんだよね。冴子の笑顔とこのケーキ屋さん好きだな」

窓の外を見つめながら、沙智はゆっくりとした口調で言ってくれた。私ってば恥ずかしくなってきた。

「海野君も冴子の笑顔好きだと思うよ」

「そ…そうかなあ…？」

「私はそう思うよ」

沙智は窓の外から私に視線を合わせて言ってくれた。

笑顔…。享平は私の笑顔は好きですか…？

それから、三日が経ってまだ仲直り出来てない。時間が経つと仲直りしにくくなってくるのに、未だに行動に移せてない。

その日の放課後、有森君を介して享平に中庭に呼び出されちゃった。大体の話は想像つくけどなんだろう？ 気になっちゃうよ。

中庭に着くと享平は来てて、私が近付くと下を向いていた顔を上げた。

「冴子…呼び出してごめんな」

「うつん、いいよ」

何事もなかったように首を振るけど、すごくドキドキ。

「話があつてさ。もう一度、やり直してくれないかな？ 自分自身せつかく冴子とより一層仲良くなりたいのに、冴子から二人で会わないほうがいいって言われてショックだった。冴子が熱で倒れて休んで、学校に出てきても同じクラスなのに話せない、会えないなんてかなりキツかった。だから…もう一度、一からやり直したいって思ってる」

今までに見たことのないような真剣な享平。

享平の気持ちはちゃんと私の心にも伝わってきた。

「いいの。あの時は私が悪かったんだし、頭を冷やしたかったから、あんなこと言っちゃったんだ。ごめんね」

私もストレートに自分の気持ちを享平に伝えた。

「オレも悪かった。キツイ事言つて…」

「全然いいんだよ」

この前の事、思い出したら涙が出てきそうになる。

「ホラ、そんな泣きそうな顔するなって。辛くなるだろ？ 仲直りの証に握手しようぜ」

享平は顔を赤くしながら右手を出す。

私も享平につられて顔を赤くして、右手を出す。

「これからも仲良くな！」

「うん！ 私は強いから大丈夫よ」

「強いなんて言葉使うなよ。そんなの、冴子に似合わないよ」

享平の言葉に目を丸くしてしまうけど、

「そうだね。早く教室に戻ろう」

「オウ！！」

強い。そうだね。私には似合わないよね。

私と享平、仲直り出来たよ。

初夏の風

新学期が始まって二ヶ月。もう六月になった。梅雨の季節。早いよね。この前、やっと二年になったところなのに。パパには認めてもらってない。二人できちんと伝えようって言ってるんだけど、まだ言えてない。早く伝えなきゃいけないよね。

「享平、今日部活休みだったよね？」

「うん、休みだぜ」

「じゃあ、パパのところこう」

「もしかして、認めてもらいに…？」

「そのもしかして、だよ」

私は明るく返事する。

「別にいいけど…」

享平ってば不満顔。

「行くの嫌？」

「嫌じゃないよ。今日、行こっか？」

「オッケー！ 享平、ありがとうね！」

「決まるとソワソワするな」

享平、今から緊張してる。

緊張しても何も変わらないんだけど、私も緊張してきたよ。

「言う時は、もっとソワソワするんじゃない？」

「多分な」

「大丈夫？ なんか、心配だな」

「言えるよ。冴子は心配しなくてもいいよ」

享平は苦笑しながら答える。

「享平だから心配だな」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「まっ、パパは言えばわかる人だから…」

「わかってるよ」

そう言いながら、享平は笑顔になる。

「冴子！」

「あ、沙智と有森君！」

「何話してんだよ？」

有森君は私達に聞いてくる。

「なんでもねーよ」

「なんだよ、それ」

「お前らこそ二人でどこ行ってたんだよ？」

「職員室に用事で行ってたんだよ」

「へえ…二人の付き合いがバレたってか？」

享平はケラケラ笑いながら言う。

「そんなことと呼ばれねーよ。オレは部活で、沙智は委員会で呼ばれて、職員室から二人で来たんだよ」

「仲良いよな」

「お前らもだろ」

二人の会話に、私と沙智は笑いあった。

放課後になって、私と享平はパパがいる職員室まで行った。

私達の緊張も最高潮に達した。

三階にある会議室、私と享平とパパの三人でいる。

誰一人として口を開かない。

どうしよう。何か言わなきゃ。パパに伝えたいことあるのに…。

そう思った瞬間――。

「認めて欲しいのか？」

パパは重い口を開いた。

「そうです」

享平ははつきりとした口調で答える。

「そうだな……」

考え込んでしまうパパ。

享平の真剣でまっすぐな目は、パパに向けられている。

早く返事をして欲しい。そんな目をしているようにも見える。

「よし、認めてやろう」

「えっ？ ホントですか？」

「ああ……。お前達の気持ちには負けたよ。海野、冴子を大切にするんだぞ」

パパは笑顔で言ってくれた。

「わかってます」

享平の笑顔。

私も思わず笑顔になってしまう。

「パパ、これから駅前のケーキ屋さんにいきましょう！ すっごくケーキがおいしいんだよ！」

「行きたいけど部活があるんだ」

「え——っ。じゃあ、享平も部活ってことだよな？」

思いつきり不満声の私。

「仕方ない。次の休みの時な」

「海野もそう言ってるんだ。次の休みにでもいきましょう」

「わかった。ホントにホントだよ」

「約束するよ」

「ヤッタね。その時は三人で行こう。それと、沙智と有森君もね」

「随分、大勢なんだな」

苦笑気味のパパ。

「いいの。大勢のほうが楽しいもんね！」

「そうだな。じゃあ、行くぞ」

パパは立ち上がる。

私ってば嬉しさのあまりペラペラ喋ってた。

「良かったね、享平」

「うん。オレ、ずっと緊張してた」

「私も。短い時間なのに長く感じたもん」

「そうだな。これからヨロシクな！」

そう言っと、享平は右手を出す。

私も右手を出して、二人の手が重なりあう。

「オレ、部活行くな。また、明日な！」

「うん！ 明日ね！」

私は部活に向かう享平の後ろ姿を見つめる。

今までは色々あった。でも、今日、やっとパパに認めてもらえた。

岡崎さんのことで、すごく嫉妬してた時もあった。それで、私一人でずっと悩んで、熱も出して倒れて、享平に迷惑かけちゃった。それに、二人で会わないほうがいいって言っちゃったりした。私って最低だよ。享平と別れることになったら……って思った。でも、こんなことがあったから乗り越えられた時のこの瞬間が嬉しいし、これから享平と仲良くしてきたいって思ってるよ。

岡崎さん、享平に告白したみたい。享平はちゃんと断ってくれた。

マナージャー辞めるって聞いた。享平にフラれたから辛いんだよね。岡崎さん、あなたの気持ちもよくわかる。好きな人の側にいけない辛さ。フラれた後の辛さ。岡崎さんにもいい人見つかるといいな。私と享平、たくさん辛いこともあるけど、楽しいことがたくさんあったほうがいいし思い出も作っていききたい。

享平とずっと仲良しでいられますように――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1179f/>

二人の小さな恋物語

2010年10月14日13時09分発行